



日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL. 03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



撮影：岩下 毅（朝日新聞社映像報道部）

カメラ目線もバラバラ

「米国第一主義」を掲げるトランプ政権との溝が鮮明になったシチリアでのG7サミット。

協調の枠組みが揺らぐ=5月26日、イタリア南部シチリア島タオルミナのギリシャ劇場

*米政府は6月1日、地球温暖化対策の「パリ協定」離脱を表明

**新理事長に小田尚さん（読売）就任
副理事長に荒木裕志さん（NHK）、
近藤順夫さん（共同通信）**

日本記者クラブは5月29日、社員総会を開き、理事29人、監事3人を選出し、第23期の執行部がスタートした。クラブの役員（理事・監事）は1期2年。選出後、直ちに理事会が開かれ、互選によって、伊藤芳明さん（毎日新聞）の後任の理事長に、読売新聞グループ本社取締役論説主幹の小田尚さんが選ばれた。また副理事長には、NHK理事の荒木裕志さん（再任）、共同通信常務理事の近藤順夫さん（新任）の2人が就任した。

伊藤さんは吉田慎一さん（朝日新聞）の後を受け、2014年5月に理事長職に就き、クラブのかじ取りに当たった。

第18代理事長に就任した小田さんは政治部出身で、11年から16年まで、クラブの理事（会員資格委員長）を務めた経験がある。

新理事長は、5人の理事に各委員会の委員長を委嘱した。顔触れは左記の通り。

総務委員長＝原田亮介さん（日本経済新聞、再任）、会員資格委員長＝小松浩さん（毎日新聞、新任）、企画委員長＝西村陽一さん（朝日新聞、再任）、会報委員長＝小林毅さん（産経新聞、新任）、施設運営委員長＝岩田栄一さん（TBS、新任）。

（土生修二）
（3ページに新旧理事長のあいさつ、4ページに新役員名簿、24ページに2016年度決算書、付録・同事業報告要約版）

プレス向け行事は年間223回 16年度の事業報告・決算を承認

日本記者クラブの社員総会が5月29日開かれ、2016年度の事業報告、決算が承認された。

●歴代4位のプレス向け行事数

当クラブが16年度に主催した記者会見、昼食会、プレスツアー、記者ゼミなどプレス向け行事は223回となり、創立以来、半世紀近い歴史の中で上から4番目を記録した。これに試写会や記念講演会などを加えた行事総数は249回となった。

16年度の事業の特徴としては、①討論会、パネルディスカッションなど複数のゲストを招いた企画②進行中のニュースに対応したシリーズ企画③国内外へのプレスツアーの積極展開などがあげられる。

第23期役員名簿／会議報告	4
日本記者クラブ賞 受賞のことは	5・7
松尾文夫／宮城克文(チューリップテレビ)／森重昭	
クラブ賞贈賞式・パーティー	8
クラブゲスト	9
桐竹勘十郎・文楽人形遣い／ポール・シェアードS&Pグローバル・チーフエコノミスト／西野純也・慶応大教授／エイブラハム・クーパー・サイモン・ウィーゼンタル・センター副所長／セイコウ・イシカワ駐日ベネズエラ大使／葛野尋之・一橋大教授／アラン・スミス・フィナンシャル・タイムズ・データ可視化担当エディター／イラク北部アルビル派遣日赤医師	
会見リポート	10・13
リナス・リンケビチュウス・リトニア外相／小野寺五典・元防衛相、長島昭久・元防衛副大臣／ヴィトルド・ヴァシチュコフスキ・ポーランド外相／石破茂・前地方創生相／川村元気・映画プロデューサー・小説家／ミヘイル・ジャネリゼ・ジョージア外相	
クラブ賞受賞記念講演会	
第5期記者ゼミ	14
ワーキングプレス	15・17
マクロン仏新大統領 朝日新聞社 大野博人 韓国大統領選 日本テレビ 藤田賢治 今治・連続殺傷事件 愛媛新聞社 二宮京太郎	
新・列島報告 高知県大川村	18
高知新聞社 森本敦士	
被災地通信 「東北で良かった」	
発言 河北新報社 今野俊宏	19
書いた話書かなかった話	20・21
私が見た江副浩正さん カリスマ経営者は根暗な好人物だった 森 一夫	
リレーエッセー	22
新米金融記者の頃 「悲劇の総裁」佐々木直さん 読売新聞社 久保伸太郎	
試写会	23
笑う101歳×2 川島正英 Life 共同通信社 高橋宏一郎	
2016年度決算書	24・25
寄贈書	25
マイBOOKマイPR	26
付録 2016年度事業報告	

い記者が持ち回りで講師を務め、各社協力で技術向上をはかる新しい方式を導入した。

●会費収入減に支出抑制で対応

決算は、正味財産増減計算書(24頁参照)によると、経常収益(収入)面では8割を占める受取会費と貸室収入などの事業収益も共に前年度を下回り、寄付金を除くと収益全体では約650万円の減少となり、総額は3億8793万円となった。このなかで、個人会員は全ての区分で会員数が前年度よりも減ったこともあり、プレス会員会費は前年度比で417万円減少した。

一方、経常費用(支出)は、事務局人員1名減などで給与、賞与の件費を604万円減らすなどで抑制し、総額は対前年度で1361万円減の3億7515万円となった。

(専務理事 土生修二)

●独立、連帯、高揚を内幸町から

9階の会見場や10階のアラスカに大使や外国人ゲストを案内すると、皆さん、窓に広がる日比谷公園の緑に感嘆の声を上げる。

そこで注釈をつける。

「左のビル群は霞が関の官庁街。右手の高層ビルは大手町のビジネス街。政府と経済の2つのビッグパワ―の間に位置し、両方をチェックするのがわれわれ独立したジャーナリズムです」。微笑む人もいれば、肩をすくめて黙る人もいた。

8年2カ月、内幸町に通い続けた。それまでの34年は新聞記者だったのに、延長戦を投げているようでもある、不慣れた足でボールを追いかけているようでもあった。

日本記者クラブは日本で唯一のジャーナリスト組織だ。日ごろは競争に明け暮れ、会社の論理や指示に縛られていても「記者」と名乗るだけで境界を越えてつながる場だ。ポスト・トゥルースの時代にあつて、独立した記者の連帯と高揚が内幸町から広がってほしい。

中井良則
(5月末、顧問退任)

インターネットの普及で個人がニュースを発信できる時代になった。実際、トランプ米大統領は、ツイッターで一日に何度も個人的見解を世界中に送っている。こういう時代にプロのジャーナリストのやるべきことは何か、が問われている。

日本記者クラブの理事長を務めた滝鼻卓雄氏（元読売新聞東京本社社長）が、近著『記者と権力』（早川書房）でこう説いている。

《ジャーナリストは「塀の上」を歩かなければ、真のネタはつかめない。職業としてのジャーナリストが自身自身を成長させるためには、「塀の

この3年間、取材し執筆することを生業としてきたものとして、まわりつくような閉塞感がどんどん強まっていくのを感じていました。それは今年1月のトランプ米政権発足で、より一層はつきりした輪郭を持って現れてきたように思います。

ネット社会の中で、個人個人が情報の発信機能を手に入れ、ブログで、ツイッターで、真偽を問わずおびただしい量の情報が刻々と飛び交う空間が出現しました。新聞社やテレビ局だけが情報発信を担っていた時代は過去のものとなっています。

政治や経済のトップが、記者会見

上を歩け」は重要な意味を持つ言葉である。

ここでいう「塀」とは、刑務所の高い塀のこと。その上を歩いてくっして内側に落ちてはいけませんが、だ

「塀の上の歩き方」を学び合おう

小田 尚

からと言って、外側だけを歩いていては、黄金のネタは拾えない。合法と違法、正義と非正義、公正と不公正などそれぞれの「境界線」を見極めたうえで、その線の上に立つて、

慎重に取材の歩を進める」

「塀の上の歩き方は、自分の頭で考えなさい」と突き放しながら、ここには滝鼻氏が塀の上を歩いてきた記録の一端が記されている。

この歩き方の共有は、メディア各社が取り組みなければならない重要な課題でもある。

メディア各社の共同体である日本記者クラブでも、記者会見の企画運

を開くよりは、情報を一方的に発信できるツールとしてネットを活用することが増えてきました。最も際どい姿をトランプ政権に見ることができま

頭越しに発信する風潮は、トランプ政権にとどまらず、各国の政治指導者に多かれ少なかれ広がっているように思われます。「トランプ流」が、情報公開の新たな標準になることを

信頼する「情報発信基地」に磨きを

伊藤 芳明

ク・ニュース」と切り捨て、「もう一つの事実」として都合の良い情報を流し、批判的なメディアを記者会見から排除する。

都合の良い情報だけをメディアの

危惧します。

日本記者クラブは、一方的な情報発信に歯止めをかけ、バランスのとれた上質な情報を獲得しようと、ニュースメーカーの記者会見を開き、

営だけでなく、現役記者を対象にした「記者ゼミ」を続けている。

昨年度の記者ゼミは、記者に必要なIT技術を習得するため、ITに強い各社の記者が持ち回りで講師役を務めた。今年度はIT講座に加え、調査報道もテーマにする。

メディア各社は、スクープを狙って競争を展開している。それが、読者、視聴者を引き付ける魅力を生んでいる。こうした競争のレベルを高くするために、日本記者クラブを舞台に、各社協力で記者の「取材力」の底上げを図っていききたい。

（読売新聞グループ本社取締役論説主幹）

討論会を仕掛け、取材団を現場に送り、記者ゼミでスキルに磨きをかける努力を続けてきています。

特定秘密保護法、集団的自衛権、戦後70年、憲法改正……。さまざまなテーマの一つ一つで、クラブが健全なジャーナリズム活動に少しでもお役に立てたとすれば、理事、会員、そして事務局の皆さんの奮闘の賜物です。これからも小田尚新理事長のもと、信頼できる情報発信基地としての機能に一層の磨きをかけていたきたいと願っております。3年間、本当にありがとうございました。

（毎日新聞社論説特別顧問）

第23期役員（2017・5（2019・5）

*役職は5月25日現在

◇理事長(新)	小田 尚	読売新聞グループ本社取締役論説主幹
◇副理事長(新)	近藤 順夫	共同通信社常務理事
◇副理事長(再)	荒木 裕志	日本放送協会理事
◇専務理事(再)	土生 修一	日本記者クラブ事務局長
◇理事・総務委員長(再)	原田 亮介	日本経済新聞社専務執行役員論説委員長
◇理事・会員資格委員長(新)	小松 浩	毎日新聞社主筆
◇理事・企画委員長(再)	西村 陽一	朝日新聞社常務取締役
◇理事・会報委員長(新)	小林 毅	産経新聞社取締役(編集・論説・正論担当)
◇理事・施設運営委員長(新)	岩田 栄一	TBSテレビ報道局長
◇理事	渡邊 祐司	時事通信社取締役編集局長
	五十嵐正剛	北海道新聞社広告局長
	石杜 有慎	岩手日報社東京支社長
	深田 実	中日新聞社取締役論説担当兼東京本社論説室論説主幹
後藤 栄司		岐阜新聞社執行役員東京支社長兼営業部長
林 康生		新潟日報社執行役員東京支社長
	下尾 芳樹	京都新聞社東京支社長
	堅田 正剛	高知新聞社東京支社長
	行武 亨	西日本新聞社執行役員東京支社長
	加藤 和人	宮崎日日新聞社東京支社長
	袴田 直希	日本テレビ放送網取締役執行役員報道局長(兼)解説副委員長(兼)報道審査員長
	篠塚 浩	テレビ朝日取締役報道局長
	岸本 一朗	フジテレビジョン常務取締役
	吉次 弘志	テレビ東京報道局長
	小津信一郎	中京テレビ放送取締役東京支社長
	伊東 亮	関西テレビ放送取締役報道局長
	小林 幹雄	RKB毎日放送東京支社長
	川嶋 明	日本新聞協会専務理事
	木村 信哉	日本民間放送連盟専務理事
	西野 文章	日本プレスセンター専務取締役
◇監事	宮田 俊範	中国新聞社執行役員東京支社長
	林 俊明	徳島新聞社東京支社長
	三木 明博	文化放送代表取締役社長

■会議報告

●第90回定時社員総会

(5・29 会場)

書面議決社員を含め出席社員計107社の出席をもって成立(定足数69社員)、定款25条により、伊藤芳明理事長が議長になり開催された。2016年度の事業報告(今号付録)・同決算(詳細2頁、別表24、25頁)を理事会案どおり承認した。続いて第23期役員の選任に移り、役員選出委員会(兼)報道審査員、監事3人を選任した。

●第601回理事会

(5・29 大会議室)

引き続き、定時社員総会で選任された新役員による理事会が行われ、小田尚氏(読売新聞「新任」)を互選、副理事長に近藤順夫氏(共同通信「新任」)、荒木裕志氏(NHK「再任」)、専務理事に土生修一(日本記者クラブ「再任」)を選定した。さらに総務、会員資格、企画、会報、施設運営の各委員会委員長を上記のように委嘱することを決めた。中井良則顧問の退任を了承した。

出席 小田理事長、近藤副理事長、土生専務理事、小松、原田、小林、渡邊、石杜、深田、林、下尾、堅田、加藤、岩田、袴田、篠塚、岸本、伊

東、川嶋、木村、西野の各理事、宮田、林、三木の各監事。

●第383回会報委員会

(5・10 大会議室)

6月号の編集について協議した。第22期を終えるに当たり、各委員が新企画や今後の会報の在り方について意見を述べた。

出席 飯塚委員長、大辻、鈴木、吉澤、大寺、藤井、長崎の各委員。

●第474回企画委員会

(5・15 会場)

第22期を終えるに当たり各委員が所感を述べ、今後の会見運営やゲスト候補、研究会のテーマなどについて意見交換した。

出席 西村委員長、坪井、福本、橋本、脇、別府、宮田、榊原、杉田、川上、瀬口、石川、傍示、山田、久保、竹田、播磨、川戸、和田、川村、梶本の各委員。

●第477回会員資格委員会

(5・18 大会議室)

6月1日付入会を審議し、理事会に答申した。

出席 増田委員長、栗原、海保、石田、越中、鈴木、早坂、山本の各委員。

日本記者クラブ賞

中国と韓国との和解に取り組みたい

松尾 文夫



今回の受賞で改めて噛みしめているのは、「あの戦争を経験した最後の世代」に属する一人としての責任の重さである。そして、やり残した課題の大きさである。

父親が旧陸軍の職業軍人であったこともあって、私の人生の記憶は1936年2月、父の任地であった中国の山海関から、東京で急死した祖父の葬式に出席するため、母と一緒に船で一時帰国したときから始まる。2歳半であった。

小学2年生で太平洋戦争が始まり、その半年後の4月には、東京の

戸山でドーリットル初空襲を目撃した。5年生の3学期には父の任地の四国の善通寺でグラマン戦闘機の機銃掃射を逃れ、そして敗戦ひと月前の45年7月19日には、墳墓の地である福井市でB29、127機の夜間絨毯爆撃を奇跡的に生き延びる。

日米両首脳による相互献花のアイデアも、こうした私の戦争体験の中から生まれたと思う。

95年2月、ドイツのドレスデンで米英旧連合軍による爆撃50周年を弔う手厚い鎮魂の儀式が行われた。3万5千人というドレスデンの死者数に対して、日本に対する「夜間無差別焼夷弾爆撃」の皮切りとなった45年3月10日の東京大空襲の死者数は8万3793人。ドレスデンよりもはるかに多い。しかし、こうした日本流に言えば「お線香を上げる」和解の儀式はまだ行われていない。

ドレスデン和解のニュースに接して、私は福井の芋畑でB29の容赦ない爆撃にひたすら耐えた夜を思い出

し、強いショックを受けた。

これにこだわり続けた私は、10年後の2005年、米ウォール・ストリートジャーナル紙と中央公論に寄稿して、日米相互献花を求めるキャンペーンを始めた。11年たった昨年、この提案は多くの人々の支持を得、特にオバマ前大統領と安倍首相の「決断」も得て日の目を見た。

しかし、中国と韓国との関係は、和解とは程遠い。安倍首相のハワイでの「和解の力」演説では、なぜか東アジアへの言及はなかった。83歳で今回の榮譽に浴した私は、残りの人生を懸けて、この2つの隣国との和解の実現に、ドン・キホーテのように立ち向かいたい。

韓国との関係では、文在寅新政権が登場した今、日韓合意で決着したはずの従軍慰安婦問題の「再交渉」は避けられないと思う。中国での献花外交は、日本軍による中国人の虐殺数で日中の食い違いが大きい南京では時間が必要だとしても、日本軍の無差別爆撃によつて1万人を超す死者が出たことは間違いない重慶への献花は、今すぐにでもできる。

そして私が強調したいのは、今の日本ではほとんど論じられることがない、韓国はもとよりフィリピンまで巻き込んだ日本とアメリカの東ア

ジアにおける歴史的な古傷である。

日露戦争終結のためのポーツマス会議が始まっていた1905年7月、アメリカのフィリピン領有を日本が認め、アメリカが日本の韓国併合を承認するという秘密取引が日米間で成立した。

この桂・タフト秘密協定に基づき5年後に実行に移された韓国併合が、その後の日本の中国への「帝国主義侵略」の出発点となり、やがてあの太平洋戦争となる歴史のアイロニーが、現在の日本ではほとんど忘れられている。

しかもアメリカには、併合に反対する韓国の必死の抵抗を無視したのみならず、独立運動を展開する「フィリピン革命軍」と4年間も戦い、フィリピン側に戦死者1万6千人を出した古い傷痕がある。

韓国の「約束違反」を口にするとき、忘れてはいけないのは、この歴史である。

まつお・ふみお 1933年8月12日、東京生まれ。学習院大学卒。56年共同通信社入社。ニューヨーク、ワシントン各特派員、バンコク、ワシントン各支局長、論説委員などを歴任。共同通信マーケティング社長を務めた後、2002年に68歳でジャーナリストに復帰。著書に「ニクソンのアメリカ」銃を持つ民主主義「オバマ大統領がヒロシマに献花する日」「アメリカと中国」など。翻訳書に「ニクソン回顧録」などがある。

日本記者クラブ賞
特別賞

小さな疑問、小さなアクションが 大きな熱量に

宮城 克文
(チューリップテレビ)

富山市議会における政務活動費の不正。それは、私にとって、何年も前から頭の片隅にあった小さな疑問でした。

「疑わしい気がするけど、確かなことはわからない」——そう思いながら、あえて確かめることもしませんでした。

昨年春の番組改編でニュースデス



取材チームの中心になった宮城デスク(右)と砂沢智史記者。情報公開で入手した4300枚の政務活動費の支出伝票を1枚ずつつぶさに確認、スクープにつなげた=チューリップテレビ提供

クになるまで、私は、記者歴の大半を政治記者として過ごしてきました。

記者として、決して権力者の意向を忖度したつもりはありません。ただ、死に物狂いで権力と対峙してきたか？と問われれば、そうでもありませんでした。

今回、そんな私が富山市議会の政務活動費の不正について仲間たちと共に調査し、一定の成果にめぐまれたのは、上司や同僚の熱量に突き動かされたからです。

チューリップテレビの報道制作局は、記者もディレクターもアナウンサーも含めて20人余りの小さな所帯です。資金力もマンパワーも成功体験も決して十分ではありません。

しかし、昨年4月の富山市議による報酬増額要求を機に始まった今回の調査報道では、みな、胸の中にある小さな疑問を素直にアクションにつなげました。

圧力や不利益を恐れずに情報公開

請求の手続きを進めた記者、ひるむことなく大物議員に食らいつく取材記者、昼夜を問わず資料の読み込みや情報収集に汗をかけた記者、成果につながるかどうかかわからない地道な調査を見守り、鼓舞してくれた上司。

私は、そんなチームの中で、毎日必要な取材先に記者やカメラマンを配置したり、証拠書類のチェック作業に参加したり、時には取材に参加したり、取材の進捗に合わせて記者たちと意見交換したり、かつての政治記者経験の中で得たわずかなネットワークで情報を集めたりしました。

それぞれの記者の抱いていた疑問や問題意識は、人によって異なると思います。

例えば、「議員は報酬をもらい過ぎじゃないのか」「議員の日頃のお金の使い道をもっと知りたい」という素朴な疑問や、「多様な民意を反映していない地方政治に喝を入れたい」という意識。ほかにも、「電波停止」「マスコミを懲らしめる」などの発言が国政から飛び出す中、「萎縮しないぞ」という意地もありました。

それらの一つ一つの疑問や問題意識が小さな熱量を生み出し、お互い

に作用しあって大きな熱量へと発展し、私たちはそれに突き動かされました。

結果として、富山市議会で長年ひそかに行われていた政務活動費の不正が次々に明らかになりました。これまでに14人が辞職し、不正の総額はわかっていくだけで4000万円余りに上ります。

一人一人の力はわずかでも、前向きなマインドが多数派になると、不思議な力が湧き出ることを学びました。そして何よりも強調したいのは、周囲に前向きマインドを伝播させていく要因となるのも、一人一人の小さな行動なのだということです。

このたびはこのような荣誉にあずかり、身に余る光栄です。取材にあたったチームの一員としてお礼を申しあげます。

大先輩の皆さまによる地方の若い記者たちへの激励と受け止め、今後の調査や取材を進める上での励みにさせていただきます。

みやき・かつふみ 1997年入社。富山県政記者、ニュースキャスターなどを経て、2016年から報道制作局ニュースデスク。

チューリップテレビ 1990年開局。本社は富山県高岡市、略称はTUT。JNN系列局。社員数約70人。

日本記者クラブ賞
特別賞

落涙したあの日を忘れず
被爆の恐ろしさ後世に伝え続けたい

森 重昭



名誉と伝統のある2017年度日本記者クラブ賞特別賞を授与していただき、まことに光栄です。心より感謝申し上げます。

私がこれまでしてきたことは、広島と長崎で死んだ連合軍捕虜の名前と遺影を登録し、彼らを追悼し、慰霊をしたことです。随分時間がかかりましたが、多くの人々のご支援をいただき、20人の捕虜のうち、16人

の登録に成功しました。

16年4月11日、アメリカのケリー国務長官が広島においてになりました。そして同日、外務大臣ら6人と共に原爆ドームを見学されました。その様子をテレビで見ました。その場所に米兵捕虜が埋められていたことは、今では誰も知らない事実です。戦後2年間、米兵捕虜は原爆ドーム前の土手に埋められていたのです。2年後に広島別院の住職が掘り出し、火葬。骨は平和記念公園内の原爆供養塔に収められました。その住職が生きておれば、会って話を聞こうと思う、探しました。

昨年、ついに見つけました。三原の寺の住職でした。嬉しくて手が震えました。電話に出た人に用件を告げると、「それは自分の祖父ですが、残念ながらすでに他界しました」とのこと。それ以前に、広島別院のほかの副住職が遺骨を原爆供養塔に収めたが、原爆慰霊碑に名前は記していないということを調べていたの

で、大変残念でした。

私はもう1つ大事なことを調べていたのです。それは遺骨のアメリカ人捕虜が1人か2人かということでした。私は相生橋の付近で死んだ2人の米兵の名前を突き止めていました。70年前のことを調べていたので

16年5月27日、広島では大きな出来事がありました。アメリカの現職のオバマ大統領がおいでになったのです。献花式がありました。その式に、私はホワイトハウスから特別招待されたのです。晴天のへきれきでした。

外務省の高官の案内で私は献花式の招待席に着席しました。後ろを見ると広島県知事と広島市長が、横を見ると長崎市長と長崎県知事が隣つこの方に、広島県議会議長と市議会議長が列席されていたのです。もしかししたら、私は最上席？ やはりそうでした。それも一番で。隣は被団協の坪井直さん。彼は日本政府から一番で特別招待されていました。

献花が終わリスピーチが始まりました。最前列で生の大統領の演説を聞きました。ア・ダーズン・アメリカン。私のやったことに触れられました。飛び上がるほど嬉しかった。オバマ大統領が私の前においてにな

った時、思わず涙がこぼれました。それを見て、大統領は私をしつかり抱擁してくださいました。私の長い長い被爆調査にアメリカはこういう形で報いてくださったのです。

後日、駐日アメリカ大使館からメールが来ました。「あなたのやったことが国を動かしたのです」。私はこの言葉を一生忘れないつもりです。わが人生で最高の感激をした瞬間でした。

このような賞をいただいたので、これから何をするのか記します。原爆の後遺症の啓蒙です。

被爆者は放射線を浴びています。放射線を浴びると人体の染色体に傷がついたり穴が開いたりして、修復できない人が後日、それも何十年もたつてガンなどになるのです。私は放影研の博士たちの支援を受けながら人々に被爆の恐ろしさを伝え、核廃絶運動を続けたいと思います。

これが受賞のことばです。ありがとうございました。

もり・しげあき 1937年3月29日、広島市生まれ。己斐国民学校3年、8歳の時に、爆心地から約2.5キロで被爆。中央大学卒。山一証券、日本楽器に勤務する傍ら70年代から、原爆で死亡した米兵捕虜の調査を開始した。著書に『原爆で死んだ米兵秘史』(2016年 潮書房光人社)などがある。第64回菊池寛賞受賞。

日本記者クラブ賞・同特別賞贈賞式 パーティー

5.29

2017年度日本記者クラブ賞・

同特別賞の贈賞式が5月29日(月)午後5時半から、10階レストラン・アラスカで行われた。式に先立ち、同日午後の理事会で伊藤芳明理事長が退任し、小田尚・読売新聞グループ本社取締役論説主幹が新理事長に選出されたことが発表され、新旧理事長がそれぞれあいさつした。

贈賞式では小田新理事長から、クラブ賞の松尾文夫さん(共同通信出身)、特別賞の宮城克文さん(チューリップテレビ報道制作局デスク)、森重昭さん(歴史研究家)に、賞状と副

賞が贈られた。

松尾さんは贈賞理由である日米の相互献花が実現した今、これからは中国・韓国との和解に取り組みたいと抱負を語った。昨年死去した朝日新聞出身の若宮啓文氏や元駐日米大使のシーファー氏、共同通信社の仲間や家族への感謝も述べた。

チューリップテレビの宮城さんは「この受賞は私たちの成果をたたえるものではなく『地方の記者、もつと頑張れ、もつと励め』という激励なのだと思う」とあいさつ。「これから今まで通り、小さな疑問を小

さなアクションにつなげていく姿勢を貫いていきたい」と話した。

森さんは時折声を詰まらせながら思いを語った。会場に集まった記者に向け「皆さんは名刺1枚で誰にでも会えるでしょう。でも私にはそれができないんですよ」と、40年以上にわたる被爆米兵調査の苦労と、それを情熱で乗り越えたからこそ、今日の受賞があると話した。また、原爆投下後、被爆者が無償で医療を受けられるよう国に働きかけたのが、森さんの義父だったことも披露した。

会場には23期役員(4ページ参照)のほか受賞者の関係者、クラブ会員ら約220人が集まった。

(村田茜)



小田尚新理事長(左)と談笑するチューリップテレビの宮城克文デスク(中)、服部寿人・報道制作局長



ノンフィクション作家の保阪正康氏(右)も松尾文夫氏のお祝いに



贈賞式後、日本テレビのインタビューを受ける森重昭夫妻



「ご苦労様でした」一顧問退任の中井良則氏(中)を囲む杉田弘毅企画委員(共同・左)と土生修一専務理事



下記のゲストの会見レポートは
10～12ページに掲載しています

リナス・リンケビチュウス リトアニア外相

■5・9(火) 記者会見／司会：脇祐三委員／通訳：宇尾真理子
／出席：25人

小野寺 五典 元防衛大臣

■5・17(水) シリーズ企画「北朝鮮の核とミサイル」⑥／司
会：倉重篤郎委員／出席：102人

ヴィトルド・ヴァシュチコフスキ ポーランド外相

■5・19(金) 記者会見／司会：鶴原徹也委員／通訳：西村好
美／出席：35人

石破 茂 前地方創生大臣

■5・22(月) 著者と語る『日本列島創生論 地方は国家の希望
なり』／司会：倉重篤郎委員／出席：108人

川村 元氣 映画プロデューサー・小説家

■5・29(月) 総会記念講演会／出席：102人

ミヘイル・ジャネリゼ ジョージア外相

■5・31(水) 記者会見／司会：土生修一専務理事／通訳：宇
尾真理子／出席：32人

葛野 尋之 一橋大学教授



「包括的な共謀罪は、処罰の膨
張、捜査権乱用、少数意見の圧迫
などを招く」として反対を表明。
「テロ資金提供処罰法改正でテロ
準備行為は処罰可能、早期処罰規
定も予備罪など72もあり現行法で
対応できる」。「自由な社会が失わ
れる」と警鐘を鳴らした。

■5・26(金) 研究会「組織犯罪処罰法改正案について」①／司
会：瀬口晴義委員／出席：32人

アラン・スミス

フィナンシャル・タイムズ データ可視化担当エディター



英国家統計局出身。FT紙で使
われるグラフの総責任者。「人の
記憶に残るのは、数字よりビジュ
アル。だからデータの可視化が重
要」。棒グラフの縦横の軸を入れ
替えた例などを見せ「グラフは文
字抜きで理解できなければいけな
い」と力説した。

■5・30(火) 研究会「ニュースメディアとグラフィックス」／司
会：山本智・NHK報道局ネット報道部チーフ・プロデューサ
ー／通訳：秋山賛／出席：45人

イラク北部アルビル派遣日赤医師

杉本卓哉(熊本赤十字病院外科医)／渡瀬淳一郎(大
阪赤十字病院救急医)／井上芳門(名古屋第二赤十字
病院麻酔科医)／高尾亮(熊本赤十字病院麻酔科医)

4人は今年2月からイラク北部で紛争に巻き込
まれた住民を治療した。「自宅を爆撃された家族は、
強く臭う黒い液体を浴び、顔がむくんでいた。化
学剤を含む爆弾だと思う」。「患者の傷を撮影して
いたら『もっと撮って世界の人に知らせてくれ』と
言われた」。生々しい報告が続いた。

■5・31(水) 記者会見／司会：傍文昭委員／出席：28人

桐竹 勘十郎 文楽人形遣い



著書では、14歳で文楽協会人形
部研究生となって以来の半世紀を
振り返った。会見では人形1体を
3人で操る「三人遣い」の実演も
行われた。三人遣いは約280年前
に考案されたという。「足、手、
頭と段階を踏んで修行を積み、
自然に人形を遣えるようになる」

■5・9(火) 著者と語る『一日に一字学べば……』／司会：瀬口
晴義委員／出席：40人

ポール・シェアード S&Pグローバル チーフ・エコノミスト



経済的視点から、トランプ政策
の光と影を語った。移民排斥や保
護主義などのリスクはあるが、減
税・規制緩和・インフラ投資に対
するウォール街の期待は依然大き
いと指摘。「貿易戦争までは進ま
ない」「TPP離脱はあまり悲観的
になる必要はない」とも。

■5・10(水) シリーズ企画「トランプ政権：米国と世界の行
方」⑧／司会：播摩卓士委員／出席：50人

西野 純也 慶応大学教授



韓国大統領選は「共に民主党」
の文在寅氏が当選、9年ぶりに進
歩系政権となった。ただ文氏の得
票率は41%。さらに前政権の途中
退陣のあおりで当選後の準備期間
もなく「難しい船出になる」。「最
重要の外交課題は南北関係。日韓
関係改善は時間が必要」

■5・12(金) 研究会「韓国大統領選挙と新政権の課題」／司
会：山本勇二委員／出席：81人

エイブラハム・クーパー

サイモン・ウィーゼンタール・センター副所長



反ユダヤ主義の監視・告発など
を行うユダヤ人権団体幹部。トラ
ンプ大統領の中東訪問には「専用
機でサウジアラビアからイスラ
エルに直行したのは(中東和平への)
強烈なメッセージだった」と一定
の評価。ナチス賛美の写真などが
SNSで流布していると警告した。

■5・24(水) シリーズ企画「トランプ政権：米国と世界の行
方」⑨／司会：杉田弘毅委員／通訳：池田薫／出席：39人

セイコウ・イシカワ 駐日ベネズエラ大使



インフレが拡大し反政府デモが
続くベネズエラ。「危機」の実情
を日系2世の駐日大使が説明し
た。他国のデモの写真に説明を付
けて野党側への同情を誘うフェイ
クニュースの実例も紹介。「グロ
ーバリズムに対抗し、われわれは
新しい発展モデルを探し続ける」

■5・25(木) 記者会見／司会：中井良則顧問／通訳：横田佐
知子／出席：31人

リナス・リンケビチュウス リトアニア外相

ロシアの脅威に毅然と対応



世界を震撼させた2014年3月のロシアによるウクライナ南部クリミア半島併合から3年以上が過ぎたが、ロシアとNATO（北大西洋条約機構）の緊張は高まっている。リトアニアは対口最前線に位置するバルト三国の1つだ。国内総生産（GDP）の2%以上を国防費に充てる目標を18年に達成すると外相は明言した。NATOが設定した加盟国の目標値だが、実行しているのはわずか5カ国。NATOを国家存立の生命線とするリトアニアの危機意識が示された。

プーチン政権は巨大な軍事力や経済圧力、情報戦争などを組み合わせた、攻撃的で変幻自在な対外行動を続ける。リトアニアにとっても現実的な脅威は、地上軍の侵攻よりも「サイバー攻撃や潤沢な資金を投入して行う情報戦争などハイブリッド

型の脅威だ」と指摘。とりわけロシア語メディアを通じてプロパガンダや偽情報を警戒する。

懸念の種は、ロシアは強硬路線を見直す気配が皆無なのに欧州連合（EU）内の一部諸国に制裁緩和の声があることだ。「ロシアに圧力をかける最大の梃子だ。制裁緩和は、現状からの撤退で、事態を放置することだ」として対口融和論を批判した。リトアニア企業は制裁の影響で打撃を受けており「制裁は双方向のもの。決して喜んで科しているわけではない」と本音も明かした。

ロシアからの絶え間ない風圧にさらされながらも「わが国は非常に安定している。NATOとEUに加盟しており、投資や経済も非常に向上している」と言い切った。ソ連崩壊で欧州の一員に復帰してからの発展に、強い自信がうかがえた。

くしくも会見のあった5月9日はロシアにとって「大祖国戦争」と呼ばれる対独戦争勝利の記念日。モスクワの赤の広場で物々しい軍事パレードが行われ、最新兵器が披露された。大国主義に回帰したロシアとリトアニアに再び和解の日は訪れるのだろうか。

東京新聞外報部（前モスクワ支局長）

常盤 伸

小野寺 五典 長島 昭久

元防衛大臣
元防衛副大臣

敵基地反撃能力は必要か？

朝鮮半島情勢についてのシリーズ企画6回目。安全保障問題に詳しい国会議員2人に来ていただいた。

両氏共、5月連休にワシントンのCSIS（戦略国際問題研究所）で米国側と情報交換してきたばかり。長島氏（左）は、米国の対北戦略について、日中韓など周辺諸国との協力で北への資金を封じ込め兵糧攻めすることによって、外交的に譲歩を求めていくのではないかと、その見通しを述べた。



小野寺氏は、なお米国は全ての選択肢をテーブルの上に置いており、最終的にはオバマ政権とは異なる対応をする公算が高く、状況を甘く見るべきではない、と語った。

日本側の対応としては、小野寺氏が外交努力の重要性について言及する一方、「北側のミサイル発射能力の向上（同時発射、着弾精度、超射

程）により、イージス艦や陸上から迎撃する従来の弾道ミサイル防備（BMD）装備では対応が困難になってきた」として、発射される前のミサイルを撃つために日本は敵基地反撃能力を持つべきだ、との考えを強調。法的、技術的にも問題はなく、むしろ費用は迎撃方式よりも安く済み、米国側も日米同盟の枠内で実施することを歓迎している、と述べた。

長島氏もこれに賛同し、同時にそれはあくまでも短期的な課題であって、中長期的には、中国の台頭を念頭に弾道ミサイルだけでなく巡航ミサイル対応や東シナ海でのグレーゾーン対策も検討すべきだ、とし、それらのために防衛費も対GDPで1・2%程度が望ましい、とした。

会場からは、敵基地反撃能力を持つことがむしろ北側の暴走を呼び、状況をより悪化させることにならないか、などの質問が出た。

安倍晋三首相の憲法9条3項追加憲論については、長島氏が2項（戦力不保持）に手を付けられないのであれば改憲の意味がないと批判した。

敵基地反撃論については、最後までモヤモヤ感が残った。皆さんはいかが？

企画委員 毎日新聞社専門編集委員

倉重 篤郎

ヴィトルド・ヴァシユチコフスキ

ポーランド外相

日本とポーランド、共に歴史に学ぼう



ポーランドのヴァシユチコフスキ外相は1955年生まれ。冷戦の合間の雪解け時代に幼少期を過ごし、自主管理労組「連帯」のストが始まった1980年、ワルシャワ近郊のウツチ大学歴史学部を卒業した。大学に残って歴史学者の修行を続けていたが、80年代後半から米国の大学へ留学。その間に祖国は「社会主義圏初の非共産政権」を誕生させるに至り、帰国した1992年に外務省入り。外交官生活をスタートさせた。

今回は「日本とポーランド国交回復60周年」での来日という位置付けだった。歴史学者らしく記者会見でも日露戦争中の1904年、ユゼフ・ピウスツキ（1867～1935年）が来日し、ロシアと戦う日本に、ポーランド独立支援を要請していた

歴史を取り上げた。ピウスツキは第1次大戦後、独立したポーランドを率いた。兄プロニスワフはアイヌ研究で知られる。

ウクライナ情勢を受けた外相の危機意識は非常に強い。しかし「何も今、ポーランドと日本で軍事協力をしたいと言っているのではない。遠く離れていても、政治の想像力を働かせよう」と語り、広い視野をもって日本と関わり続けた先人に学ぶ意義を強調した。

直近の現代史に立ち戻って外相が振り返る欧州情勢の認識はとも厳しい。2007年2月、ロシアのプーチン大統領は独南部ミューンヘンでの安全保障会議で「米国はさまざまな問題で、国境を踏み越えてきた。問題を一方的に軍事力で解決しようとしている」と激しい対米批判を行った。外相は「ここで世界は目を覚ますべきだった」と訴えた。

実はポーランドと日本は、ピウスツキが活躍した1919年に一度国交を樹立している。第2次大戦を挟み1957年に国交を回復させた歴史がある。再来年は国交100周年。2年後、外相の評価がさらに厳しくなっていないことを願いたい。

時事通信社外信部編集委員

松尾 圭介

石破 茂

前地方創生大臣

「安倍改憲」は党内論議無視

政治家の著書は自慢話や暴露本的なものも少なくないが、初代地方創生相を2年近く務めた石破茂氏の『日本列島創生論』は装丁も含めて地味だが、具体的に示唆に富む内容となっている。



政治の師と仰ぐ故田中角栄元首相の『日本列島改造論』（1972年）にちなんだタイトルの同書の副題は「地方は国家の希望なり」。地方創生相として全国を駆け巡っ

て得た地方再生への知見を散りばめ、「国が地方を変えるのではなく、地方の取り組みが国を変える」と結論付けている。

安倍晋三首相の自民党総裁選（2018年9月）での3選が確実視される中、「唯一の対抗馬」と目されている石破氏。アベノミクスについても「金融緩和と財政出動は時間稼ぎで、限界がある」と指摘し、「地

方創生」を軸に成長戦略を組み立てることを自らの「政権戦略」とする構えだ。

記者会見では、「安倍改憲」について質問が集中したが、自らも参画した現在の自民党改憲草案について「国民に示して国政選挙を4回やっている」と首相の改憲案は党内論議を無視したものだとして厳しく批判。来年の総裁選出馬については「首相になれば気力、体力、精神力がボロボロになる」としながらも、「（意見が対立しても）飲んで歌って議論することと理解し合える」と党内の支持拡大への意欲をにじませた。

東京生まれだが鳥取育ちの慶応ボーイ。首相より当選回数も多く、総裁選挑戦はすでに2回。12年9月の総裁選では地方票で首相に大差をつけたが、議員だけの決選投票で涙をのんだ。

底なしの酒豪で永田町では軍事オタクぶりを揶揄した「ゲル長官」との呼び名もあるが、学生時代はキャンディーズの追っかけで、カラオケではキャンディーズメドレーを熱唱する意外な素顔も持つ。

恒例の揮ごうは「着々寸進 洋々万里」。「一歩ずつ着実に進むこと」と人懐っこい笑顔で解説した。

時事通信出身 泉 宏

川村 元氣

映画プロデューサー・小説家

元氣にするプロデュース術

邦画としては歴代興行収入2位を記録した「君の名は。」と、「怒り」「何者」という昨年プロデュースした映画が全てヒットした。時の人である。小説「四月になれば彼女は」も話題の才人は、いきなり上智大学新聞



学科出身で、もとは記者に
なりたかった
と聴衆である
記者たちを引
き付けた。

その上で、
映画は料理に
似ていて、良
い素材(物語・
テーマ)と適切な料理(監督、脚本、
俳優の選択)、工夫を凝らした盛り
付け(宣伝・広告)が必要とし、新
聞からヒントを得ることも多い、と
サービス精神も満点だった。

笑って泣ける娯楽作品が主流だった
中で、あえて悪意のエンターテイ
ンメントをつくろうと映画「告白」
を企画した体験など、着眼点がユニ
ークな話が多かった。中でも注目し

たのは、古今和歌集という古典的題
材とスマホという現代的素材、災厄
というテーマなどさまざまな要素を
盛り込んだ「君の名は。」のつくり
方。「昔のエンターテインメントの
ように、ひと言で言えるものは、も
はや通用しない」と分析しつつ、こ
う断言した。「今は、テレビを見な
がら新聞、雑誌を開き、スマホ片手
にツイッターやフェイスブックをや
る時代。ワンコンセプトでつくる作
品では読者は納得しない」

わかりやすく、正確に、という古
典的な新聞のコンセプトに対する39
歳の企画人の挑戦と、新たなニュー
ス表現の可能性の示唆を感じた。

自分のやりたいことをやってきた
だけで、今までの話は全て後付けの
屁理屈で、実はマーケティングデー
タも見たことがない、と最後に告白
したことも印象に残る。やりたいこ
とは、多くの人が気付き、何かを
感じていながら、まだ表現になっ
ていない集合的無意識を発見し、それ
を映像や文章にして幸福の形を表現
すること、という。「元氣」は、本名。
聞く者の脳を元気にし、新聞、テレ
ビを通して幸せの形を探す記者には
刺激的な講演だった。

読売新聞社文化部編集委員

鵜飼 哲夫

ミヘイル・ジャネリゼ

ジョージア外相

米国との関係深化に自信

丁寧かつ簡潔に、国の目指す方向
や対外関係をわかりやすく説明して
くれた。大学の講義を聞いているよ
うで、36歳の若さながら極めてスマ
ートな人物とみた。



欧州基準に合わせた自由度の高い
ビジネス環境
や、「世界で
最も安全な場
所の1つ」で
あり、観光資
源が豊かなこ
とをアピール
しながら、課
題である鉄
道、道路、港
などのインフラ整備に日本の基金が
投入されていることも紹介。欧州連
合(EU)と北大西洋条約機構(NATO)への加盟を目指して法制度な
どの整備に「全力を挙げている」と
強調した。

ロシアが今も国土の一部を占領し
ていることを指摘しつつ、感情的に
なることなく「武力に訴えず平和的
な紛争解決を目指す」と断言。NA

TO加盟は「ロシアと紛争を起こす
ためではない。それが地域の安定に
とって重要なのだということ」をロシ
アにも理解してほしい」と、あとか
も諭すかのように話していたのが印
象的だった。

そのロシアとはいまだに外交関係
は断絶状態ではあるが、両国の特使
同士の非公式対話の積み重ねによっ
て、通商、交通、文化交流などの実
質的な2国間の往来は実現できてい
るという。

米国のトランプ政権をどうみてい
るかという質問には、トランプ氏本
人への論評は避けて、すでに首相が
訪米して政権幹部と会談しているこ
とや、米下院が対ロシアでジョージ
アの立場を擁護する法律や決議を採
択していることを丁寧に説明し、「米
国との関係はさらに深化している」
と自信を見せた。実に堅実で見事な
答えにやや物足りなさも感じたが、
それが有能な外交官というものなの
だろう。

日本訪問は外交官を志したところか
らの夢で、それが実現したことがう
れしいと話した。日本の何にそれ
ほどひかれたのか。時間が足りずに
聞けなかったのが残念だ。

毎日新聞社論説委員 大木 俊治

日本記者クラブ賞・特別賞 受賞記念講演会

オバマ米大統領の原爆慰霊碑前で
の広島からの1年。昨年末には
安倍晋三首相もハワイのアリゾナ記
念館で平和を誓った。松尾文夫さ
んが提唱した日米首脳の花外交
は実現した。しかし、トランプの
出現が、より困難な北朝鮮危機を
もたらした。

松尾さんは、米中の「相互確証
破壊」で結ばれた関係は日米より
も深い、と指摘する。一方で、中
国との和解に踏み出したドゥテル
テは、日韓併合とフィリピン領有
承認を取引した日米の古傷をちら
つかせる。「東アジア情勢は和解



へ向け、大
きな展開を
描く時代に
入っている
」
チューリ
ップテレビ
は富山県最
後発のテレ
ビ局。社員
70人、報道
制作局はア

記者精神を熱く 調査報道の思いも熱く

ナウンス部門も含めて20人余り。小
さなローカル局にとって「特別な出
来事だった」と宮城克文デスク(写
真)は振り返った。

取材の発端は昨年4月。富山市議
会の議員報酬引き上げが、たった2
回の非公開審議会で決まった。この
動きに疑問が生じた。「会社や家族
に迷惑が」。閉鎖的な地域社会の
中で、情報公開請求すためならわれ
たが、請求を市側が情報漏えい。こ
のエラーが協力者の出現、他社の後
追い報道につながり、辞職ドミノを
生んだ。

広島平和記念公園でのオバマ大統
領との抱擁シーンが世界中に流れ、
「時の人」になった森重昭さん。原
爆で死亡した米兵捕虜の存在を、会
社勤めの傍ら40年以上調査。被爆死
した12人の米兵の身元を特定し、遺
族とも交流。日米市民レベルの戦後
和解に貢献した。

8歳の時に橋の上で被爆。その瞬
間、川の中に吹っ飛ばされた。水か
さはすぐに1メートル上がった。黒
い雨が降った。その雨は「痛かった」
と言う。学校で無数の遺体処理を目
撃した。「平和が一番」。シンプルだ
が、伝わる言葉で締めくくった。

時事通信社編集局長 橋詰 悦荘
【5・30(火)出席…110人】

会見余話



●キツネの役を全部演じたい

自著の挿絵も自身で描いた桐竹勘十郎
さん。揮ごうの際、好きな絵を添えてほ
しいと願った。

4分ほどで、文楽の演目「義経千本桜」
に想を得た、鼓を配した白キツネが現れ
た。漫画家になりたかったほどの漫画好
き。何と日本漫画家協会会員でもある。
キツネは小さい頃からのお気に入り。「文
楽に出てくるキツネの役を全部演じてみ
たい」

会見後、9月の東京公演の演目と配役
が発表された。その中に、妖狐「玉藻の
前」の伝説を扱った「玉藻前職杖」が入っ
ている。「九尾の狐」を遣う勘十郎さん
に会える。

●ラテンの血が騒ぐ

3大使即興の応援演説

予定した90分が過ぎた。セイコウ・イ
シカワ・ベネズエラ大使の記者会見は、そ
ろそろ終了か。そんな空気が少なくとも
日本人出席者の間に漂ったのは確かだ。
そうは問屋が卸さない。最前列のアラナ・
ニカラグア大使が勢いよく手を挙げた。

ニカラグア、キューバ、ボリビアの駐
日大使をイシカワ大使が招き、参加して
いたのだ。アラナ大使は質問など二の次
で、会場に向かって宣言した。「連帯と
愛情を友に贈る」。いったん火がつくと
簡単には収まらないのがラテンアメリカ
だ。キューバのペレイラ大使が当然のご
とくマイクを引き継いだ。ベネズエラ賛
歌の雄弁が止まらない。ボリビアのアイ
リオン臨時代理大使も「少しだけね」と
言いながら熱く語った。

4カ国はALBA(米州ボリバル同
盟)という協力組織のメンバーだ。シナ
リオにはない即興の応援演説。イシカワ
大使は喜んで3大使と肩を抱き合い、健
闘を称えあった。



熱弁をふるうペレイラ・キューバ
大使

第5期記者ゼミ

■IT講座2017

第1回…オリエンテーション

5・18(木)講師…松波功・中日新聞社
電子編集部／出席…38人

◎攻略の決意固める

恥ずかしながら表計算ソフトすら満足に使えないのだが、これまで業務上さほど習得の必要性を感じたことはなかった。日本記者クラブで講座を開くと聞いたので、せっかくの機会だからと、どちらかというと軽い気持ちで参加してみたが、初っぱなから心が折れそうになった。

「常識です」基本中の基本です」「知らないなんて信じられない」。講師から連発される言葉に、身の縮まる思いがする。果たして1年を通して出席することができるか、大事な取材に向かうとき以上の決意を固めている。

とりあえず、数年前に購入して以来ほとんど開いたことのなかった表計算ソフトの参考書を引っ張り出したところだ。

西日本新聞東京支社報道部

伊東 秀純

*

なお、講座で使用するソフトのダウンロード指導など初心者のための

プレ講座も前日(5・17)に行われ、15人が参加した。(事務局)

■誰でも調査報道

第1回…オープニング・シンポ

5・11(木)パネリスト…高田昌幸・東京大学大学教授、奥山俊宏・朝日新聞社編集委員、石井暁・共同通信社編集委員／出席…44人

◎三者三様の取材談

個性がまるで違う3人の経験談と掛け合いが面白いわけではない。独自取材の情報で警察と対等に渡り合った経験を振り返るとともに、



IT講座1回目。パソコンを各自で持ち込み、実践しながら学ぶ

公開情報の在りかなどノウハウを共有して記者が強くなる、と訴える朝

日新聞の奥山さん。書くべき権力の問題点を暴いたことで人脈が切れるのは仕方ない、私たちの仕事は友達を作ることでなく記事を書くことだ、と訴える共同通信の石井さん。銀行の取引規定から機関車の運転席まで、担当分野の知識は全て徹底的に学んだという元北海道、高知新聞の高田さんは、人脈頼みの権力取材には「嫌われたら困る」という落とし穴があると警告し、「いかに嫌われなくても平気になるかだ」と助言した。

熱のある場だった。報道の在り方をめぐる論議にも差しかかったが、それを進展させる時間まではなかったことが惜しまれた。

共同通信社特別報道室 澤 康臣

第2回…ハウツー基礎講座①

(リサーチ編)

5・25(木)講師…奥山俊宏・朝日新聞社編集委員／出席…43人

◎重い言葉「報道の質の底上げ」

新潟日報では原発や県政課題などのテーマを調査報道的手法で追ってきた。だが、こうしたネタを担当するのは一部の記者。日々の雑報に追われる一般の記者が調査報道のハウツーを体系的に学ぶ機会は、ほばな

いのが現実だ。

そもそも調査報道は誰でもできるのか、やらねばならないのか。そんな疑問を抱きつつ記者ゼミに参加した。2回目は朝日新聞の奥山俊宏さんが調査報道の実践的手法を解説。必要な情報に最短距離でたどり着くための方法は具体的で、すぐに現場で生かせるものが多かった。

数々のスクープで積み上げた「手の内」を伝える中で「調査報道的な取材姿勢は、報道全体の質の底上げにつながる」との指摘は重い。社の枠を超えたノウハウの共有、蓄積は報道機関の生き残りにも欠かせない。調査報道に取り組む取材班だけでなく、記者一人一人がマインドを磨く必要があると感じた。

新潟日報社報道部 武田 雅裕

《6月の予定》

*毎週木曜日午後6時から開催しています。途中登録も可能です。申し込みはseminar@jnc.or.jpへ。

■IT講座2017

1日…表計算中級
15日…QGIS入門
29日…中間報告

■誰でも調査報道

8日…ハウツー基礎講座②(取材編)
22日…情報公開と公開情報①

マクロン仏新大統領

大野 博人(朝日新聞社)

「システム」批判に応えられるか 政権運営に不安と課題

フランスの新しい大統領に、39歳のエマニエル・マクロン氏が選ばれてから2日後の夜。私はパリ・モンパルナスにあるラ・ロトンドというレストランにいた。

歴史人類学者、エマニエル・トッド氏と仏紙記者が一緒だった。2人ともマクロン氏に極めて厳しい。親グローバル化で親ユーロであるところが受け入れ難いという立場だ。

大統領選の決選に残っていたもう1人は、右翼・国民戦線のマリヌ・ルペン氏だが、人種差別的なこちらはとうてい支持できない。といってマクロン氏に投票する気にはなれないと、トッド氏は棄権、記者も白票を投じたくらいである。

ラ・ロトンドは、第1回投票で第1位だったマクロン氏が早々と祝勝会を開いた会場。超高級レストランではなくカジュアルだが、そんなに安いわけでもない。ディナーであれば1人5千円から1万円。セレブや余裕のある人たちに好まれる店だ。

決選はまだ済んでいないのにと大いにひんしゆくを買い、庶民よりエリートや特権階級に近い地を見せたとメディアでも批判された。そんないわく付きの店である。私たちは話のネタに、と足を向けてみた次第。

レストランで突然の拍手 振り返ればそこに…

で、2人がマクロン批判をしゃべり尽くしたところ、店の入り口で急に拍手が湧いた。なにごとかしらと目を向けると、なんとマクロン氏が入ってきた。25歳年上のブリジット夫人同伴である。

驚いた。批判の理由になった店だ。しばらくは、政治的な配慮から敬遠するかと思っていた。「ほら、彼がどんな人物かよくわかるだろう」と2人は無然。

どんな人物か？ それを選挙期間中によく耳にした言葉で言い表すならば「システム」の側

の人物ということになるだろう。

政治学者のトマ・ゲノレ氏によると、豊かな者、恵まれた者に有利なように欧州統合やグローバル化を進め、その結果、失業などの苦しみを一般の人々にもたらす仕組みを指す。それを動かしているのは少数のエリートたち。この「システム」は、トリクルダウン効果で貧しい人にも恩恵をもたらすという触れ込みだったが、失敗しているという。

実は15年前、パリでこの言葉をキーワードに掲げていた人物にインタビューしたことがある。

マリヌ・ルペン氏の父親、ジャンマリ氏である。彼も、その年2002年の大統領選で決選に勝ち残っていた。その主張の核が「システム」批判だった。取材でも「特権階級を守るシステム」「政治指導者や高級官僚が支配するシステム」と繰り返し返

し、得をしているのは強者のエリートだけ、と訴えていた。

「キワモノ」とみられていた政治家が示した認識。15年後の今、「キワモノ」ではない多くの政治家や識者が同じ言葉を使って現状を語る。隔世の感である。

求められるのは 「エリート」イメージの払拭

ルペン氏は結局落選したが、マクロン氏に対しても強い不信感が残る。既成政党と袂を分かった若者という清新なイメージはある。だが、エリート養成機関である国立行政院出身で、高級官僚や投資銀行の行員としてキャリアを積んだ。

「システム」の側の人間——。その立ち位置を変え、イメージを払拭しない限り、正統性の弱い大統領として政権運営に苦勞することになる。

ラ・ロトンドに出入りすれば、「システム」を憎む人たちからどのような視線を浴びるか。新大統領にその想像力が欠けているとしたら、前途は容易ではない。

おおの・ひろひと▼1981年入社
パブリック・リレーションズ局長
外報部長
ヨロップパブリック・リレーションズ局長
論説主幹などを経て
2016年から編集委員



マクロン新大統領の当選が決まり喜び支持者们(5月7日夜/ルーブル美術館中庭/筆者撮影)

韓国大統領選

藤田 賢治（日本テレビ）

文在寅新大統領の映像を！
ソウル深夜疾走記

投票票日当日の5月9日、午後10時。すでに文在寅氏の勝利は確定的。私はソウル中心部の光化門広場で、夜の『ニユースZERO』に向け、大統領選挙関連では締めくくりとなる中継の準備をしていた。広場には韓国のテレビ放送局4社が選挙特番の特設スタジオを設け、夜空にはピンクや青の光線が交差する。音楽が大音量で流れ、まさにお祭りムード。ライブ感があり、中継場所には申し分ない。

文氏めざし全員で猛ダッシュ

と、そこに情報が飛び込んだ。勝利を収めた文氏が、自宅からこの広場に来て勝利宣言をするというのだ。来るのは私たちがいる場所から通りを挟んだ向かいの公園。支持者がすでに集結し氣勢を上げている。是非でも本人の到着を撮影したい。中継のヒットタイムには間に合わなさそうだが、24時まで続く『ニユースZERO』の後半には追い込めそうだ。

しかし、ここからでは遠すぎる：と思ううちに中継の入り時間。落着かない気持ちで中継を終えた瞬間、支局の李カメラマンがカメラを担いで無言で猛ダッシュ。私も支局スタッフも、あうんの呼吸。三脚や機材を持ち、後を追う。文在寅氏の到着を撮れる場所へ！

会場には別のカメラがスタンバイしてくれているが、現場にいる人間としては是非でも新大統領の映像を狙いたい！ 警備や群衆でこった返す中を全力疾走。「こつちー!!」と、はぐれそうな後続スタッフを呼ぶ。ソウルに来て1年9カ月。こんな大声を出すのは初めてだが、喧噪で自分の声もまともに聞き取れない。

どこからなら撮影できるか？ 通りを横切り、公園に行くのでは間に合わない。しかし、通りのこちら側には中継車両や警察車両が隙間なく並び視界をブロックしていて、公園の様子が全く見えない。李カメラマンはそれでもわずかの車両の隙間を

発見し、体を無理やりねじ込んで突っ込んでいった（この突入が原因で今も肩を治療中）。

思えば、こうした取材を何度してきたことか。朴槿恵前大統領の罷免を求める市民集会では、警備車両は5センチの隙間も空けず、密着駐車することで道路を封鎖する。その車両の下を這い、天井によじ登り取材を進めてきた。同じ要領でいま車両の壁を抜けた！ そこは鉄柵が並び封鎖されているものの、脚立の上からならば文在寅氏の到着を撮れる絶好の場所だった！

人ひとりが立つのがやつとのこのスペースで撮影開始。その瞬間、警備が物々しくなり、黒塗りの車が到着。文在寅氏の登場だ。大歓声上がる。アイドルのコンサートでも、こうは盛り上がらないのではないのか。まさに歴史的な瞬間に立ち会っているという思いに、胸が熱くなる。この生映像はしっかりと『ZERO』のオンエアに乗っていた。

やけどするほど熱い韓国
撮影部隊も燃えた

ふと気づくと、さつきまで私たちがしかなかった狭いスペースが大混乱。私たちの頭上では車のバンパーの上に立った韓国人のスチールカメラ



直近での撮影に成功（NNNの画面から）

ラマンが3人、車のフロントガラスにしがみつきながら撮影開始。ワイパーとガラスを傷つけ、車内の運転手が怒鳴っている。しかし、車両の下を這って私たちに続いた一般市民で現場はすし詰め。ドアを開けることもできず、なすがまま。隣で文在寅の応援歌を歌っている女性は70代だろうか。年配女性でも新大統領を一目見ようと車の下を這い、突破する熱い国、韓国。

未曾有の国政介入事件から弾劾、大統領選へと至る中、多くの原稿を書いたが、何はともあれ視聴者に一番伝わったものは、このやけどするような韓国の「熱さ」だったのではないか。大統領選総決算の撮影も駆け回り、這いつくばり、「熱さ」を伝える取材だった。

ふじた・けんじ▼2001年入社 社会部警視庁記者クラブ 社会部横浜支局『ニユースevery』『ニユースZERO』などを経て 現在ソウル支局長

今治・連続殺傷事件

二宮京太郎（愛媛新聞社）

参考人女性自殺で異例の展開
いまだ不明な点多く

4～5月に愛媛県今治市の住宅街で起きた高齢者連続殺傷事件は、女性参考人が自殺するなど異例の展開をたどっている。2つの事件の背景はいまだに、ほとんど明らかにっていない。

この事件には取材当初から違和感を覚えていた。4月26日の発生から1週間、事件かどうかすら分からない状況が続いたからだ。

第1事件の県警の発表は非常に遅かった。報道向けの資料にはおおむね、こう書かれていた。「4月26日午後1時22分認知。81歳の女性が自宅で死亡しているのが発見された。腹部に刃物による刺し傷がある」。愛媛新聞社本社のファクスが発表資料を受信したのは、午後10時を回ってから。仮に犯人が逃走中の殺人事件ならば、これほど遅くなることは考えにくかった。

締め切りが迫る中、現場の記者から「県警は事件と自殺、両方あり得ると言っている」との連絡が報道部

に入った。自殺の可能性は想定して

おらず、部内では「腹部を自分で刺すことは、あまり例がないのではないのか」「発表が遅れたのは、事件性が分からなからか」との声が漏れた。

愛媛新聞は検討の上、女性を実名で報道した。事件の可能性がとみて捜査が進んでおり、県警が実名で発表している点なども考慮した。

状況判然としないまま
第2事件が発生

翌日も、翌々日も、事件なのか、自殺なのか、判然としない状況が続く。県警は28日に司法解剖を行い、死因は腹部刺傷による失血死と判明したが、事件と自殺の両方の可能性がある」と説明した。愛媛新聞では5月2日、関係者取材で女性の背中にも傷があったことを報道したが、事件性の有無は不明のままだった。

約1週間がすぎたゴールデンウィーク後半初日の5月3日、第1事件の現場から約400メートルしか離れてい

ない市営住宅で、第2事件が起きた。午前9時ごろに女性（92）が刃物で胸を刺されて死亡、長男の男性（70）が背中を切られて重傷を負った。

この日、県警は第2事件とともに、第1事件も「事件」と判断し、それぞれ特別捜査本部を立ち上げる。今治市民は二重のショックを受けた。送られてくる記者の取材メモは、「同一犯なのかどうかも分からず、通り魔的な犯行かもしれない」と不安を募らせる市民の声でびっしり埋まっていた。

翌4日、県警は動く。市内の30代の女性参考人を任意同行して事情聴取するとともに、自宅を家宅捜索。しかし、自供や逮捕の決め手になる



第2事件が発生した市営住宅を調べる愛媛県警捜査員
（5月3日／今治市室屋町7丁目／愛媛新聞社提供）

物証は得られなかったとみられ、午後11時ごろ、女性参考人を家族に引き渡した。自殺しているのが発見されたのは、5日朝だ。

取材に答えぬ県警
捜査過程解明が必要

「自殺は防げなかったのか」「証拠を十分に集めてから任意同行すべきだったのではないか」。記者レクでは、報道各社から厳しい質問が飛んだが、県警は「事情聴取や家宅捜索は適正だった」と回答した。

県警は8日、事情聴取の際に任意で採取した女性参考人のDNA型と、第1事件の現場で見つかった血痕のDNA型が一致したほか、女性参考人の自宅から押収した運動靴に付着した血痕のDNA型が、第2事件の被害女性のDNA型と合致したことを発表。以降、捜査中を理由に、県警は事件に関する取材にほとんど答えていない。

県警は女性参考人を容疑者死亡のまま書類送検する方針で捜査を続けている。事件の背景に加え、なぜ捜査がこうした経過をたどったのかも明らかにする必要があると考えている。

にのみや・きょうたろう▼2000年入社
16年から愛媛県警担当

新・列島報告⑩ 高知県大川村

議会存続に危機感 「村総会」研究始まる

森本 敦士
(高知新聞社嶺北支局)



離島を除けば全国で最も人口が少ない高知県大川村が、大きな注目を集めている。和田知士村長が4月、議会に代わる機関「村総会」の研究を始める考えを示したからだ。

大川村は四国のほぼ中央に位置し、高知市からは高知自動車道や国道などを経て約1時間20分。人口は4月30日現在、405人だ。

村総会とは地方自治法94条で定める「町村総会」のことで、条文は「町村は条例で、議会を置かず、選挙権を有する者の総会を設けることができる」とする。だが、同法が施行されて70年、総会を設置したのは東京・八丈小島の旧宇津木村(1951)

54年度)の1例のみだ。

大川村が村総会の研究を始めたのは議員のなり手不足が理由だ。村議会は定数6。公職選挙法では定数の6分の1を超える当選人の不足があった場合は再選挙となる。つまり大川村では5人そろわなければ再選挙が繰り返される。

2015年の村議選では複数の議員が引退を望んだが、新たななり手が立たず、現職全員が無投票で続投した。次回村議選に向け、現状では後継候補や新人が出る動きはない。和田村長は「議会維持が大前提だが、消極的に考えられるほど時間の余裕もない」。苦しい胸の内を明かす。

過疎ゆえに難しい人材発掘



村総会の検討が始まった大川村役場(4月/筆者撮影)

村にはかつて、約2千人が働いた白滝鉱山があったが、72年に閉山し

た。75年に「四国の水がめ」と呼ばれる早明浦ダムが完成し、役場と周辺の集落が湖に沈んだ。これを契機に村民流出が加速した。60年代のピーク時に4千人を超えた人口は半世紀で10分の1になった。

急激に進んだ過疎・高齢化。議員のなり手不足も、この流れの中にある。任期を折り返した今春、村議の平均年齢は70・8歳。ある村議は「次も出るとなると厳しい」と漏らす。

和田村長は昨年から青年団に議論を促し、村議も後継者を探しているが、人材発掘は容易ではない。現役世代の多くは村職員や団体職員で、公選法や職場内規で議員との兼職はできない。月額15万5千円の議員報酬についても、「仕事を辞めて、それだけでやっていくのは厳しい」(20代男性)という声がある。人材確保の大きな壁だ。

議会では過去にも村総会が議論された経緯がある。13年は「時期尚早」、14年は入院中や交通手段がない村民がいる状況から、「(有権者が)一堂に会することができない」として意見集約には至らなかった。

村の検討開始を受け、村議会の朝倉慧議長は5月15日、議会運営委員会に、議会の在り方や村総会の是非を問う諮問書を提出した。答申期限

は今年12月20日。朝倉議長は「議会の役割を自覚して議論を進めてほしい。まずは総会への住民の理解を深めたい」と話す。

「議会維持が大前提」 丹念に住民の声を

16ある集落のひとつを訪ねた。ある民家で声を掛け、勝手口からのぞくと、土間のテーブルに1人分の食事があった。80代の女性に村総会のことを聞くと「さあ、どうなるろうと思います。昔は選挙もにぎやかでしたが」。遠くを見る表情になった。

大川村をはじめ地方の自治体は戦後、都会に人材を供給し続けてきた。その結果として深刻な過疎・高齢化を招いた。村総会の話題は全国紙などでも大きく取り上げられ、「地方自治の未来がある」「直接民主主義の実験」という前のめりな表現をするメディアもある。しかし、村では「議会維持」を大前提に研究が始まったばかりだ。地元密着に軸足を置く地方紙記者として、村に生きる人の声を丹念に取材し、その思いを丁寧に伝えていきたい。

もりもと・あつし▼2003年入社
運動部 写真部などを経て
17年4月
から嶺北(れいほく)支局長

被災地通信⑤ 「東北で良かった」発言

「上から目線」の病理と風化の意味

今野 俊宏 (河北新報社)

政治家もわれわれも言葉は最大の武器であり、尊重しなければならぬ道具でもある。だからこそ、被災者の傷口に何度、塩を塗り込んだら気が済むのか、と考え込んだ。「まだ東北で、あっちの方だったから良かった」。今村雅弘前復興相が4月25日、自民党二階派のパーティーで言い放った言葉だ。

被災地の誰もが本音以外の何ものでもない、と敏感に受け取った。人は普段から口にしていない言葉は、とっさには出てこない。いつも永田町や地元でしゃべっていることが、そのまま口について出たのだろう。

伏線があった。今村氏は4月22日、東日本大震災の被災地を視察した。宮城県南三陸町では養殖場でカキを育てる漁師と懇談。試食したカキのおいしさで口が滑らかになったのか、視察後の記者団との懇談で、衆院選の区割り案で南三陸町が宮城6区から5区に変更された点に触れ、「被災地は特例を設けるように働き掛けたい」と強調した。人口流出に苦しむ被災地にとっては正論だが、過剰なリップサービスに鼻白む思いだった。何という口の軽さか。今村氏がそんなことを進言するはずもないことは明らかだった。

2万人の犠牲を冒流 首相の本気度にも疑問

問題発言は、その3日後。第1報を聞いた時、編集局内は「一面トッ



宮城県南三陸町の被災地視察でカキを試食する今村氏 (4月22日/河北新報社提供)

プから社会面まで全面展開しよう」と色めき立った。後に今村氏更迭を受け、二階俊博自民党幹事長が「マスコミは余すところなく記録を取り、1行でも悪いところがあれば首を取れと。なんちゅうことか」と発言した。申し訳ないが、被災地に根を張る報道機関には、うってつけの発奮材料だ。翌日の紙面では「震災で犠牲になった約2万人への冒流だ」(桜井勝延福島県南相馬市長)などと、被災地の首長や住民の声を大々的に報じた。

安倍晋三首相の任命責任は大きい。「大震災からの復興は内閣の最重要課題」。首相お得意のフレーズも、かえって本気度の低さを露呈させることになった。首相は「時間があれば被災地を訪れている」と強調しているが、事務方がお膳立てした「きれいな復興現場」だけでは、被災地の「今」は見えるはずもない。

気になるのは、首相自身が「被災者の心に寄り添う」と常々話していることだ。「寄り添う」の本来の意味は「体が触れるほどびったりとそばに寄る」。一朝一夕にできる距離感ではない。今村氏にせよ、安倍首相にせよ、家族や家を失い、今なお仮設住宅に暮らす人々の前で、その言葉を口にできるのか。河北新報は

紙面上で、「寄り添う」という言葉を安易に使わないようにしている。

「徳」によって教化する 震災の教訓を文化に

昨年7月の参院選。全国で与党が大勝する中、東北の6選挙区は野党が5勝1敗だった。環太平洋連携協定(TPP)をめぐる議論や選挙区ごとの事情があったにせよ、被災地・東北の人々が震災の風化が進む中で、政権側の「上から目線」や空疎な言葉の羅列に空々しさを感ずり取っていたことと無縁ではない。

大震災から7年目。そもそも風化とは何か。広辞苑を引くと、一般的に使われる「心に刻み込まれたことが弱くなっていくこと」は2番目に掲載されている。1番目には「徳によって教化すること」とある。本来は岩石が長い時間をかけて砂となり、土に帰っていくさまを指すという。震災で言えば、震災から学んだ教訓が当たり前のこととして浸透し、定着して文化となることだ。政治にはびこる「上から目線」の病理。「徳によって教化する」という言葉が痛烈な皮肉に聞こえる。

こんの・としひろ ▼1983年入社
仙沼総局長 報道部長などを経て
2017年4月から編集局長

私が見た江副浩正さん

カリスマ経営者は根暗な好人物だった

森 一夫



もり・かずお
1972年日本経済新聞社入社 日
経マグロウヒル(現・日経BP社)
出向 日経ビジネス副編集長
日本経済新聞産業部編集委員
論説副主幹 特別編集委員など
2013年退社

「この記事のせいで、当社の信用はがた落ちだ。告訴も考える」

リクルートの大沢武志専務は、険しい表情でまくし立てた。日経ビジネス1985年10月14日号に私が書いた「ケーススタディ リクルート『寿命』に挑む大胆な借金経営」と題する記事への抗議である。

「借金経営」と書いたのがけしからんと言うのだが、「信用棄損」とは大げさだ。「取材した銀行はみな、たくさん借りてもらって、ありがた」と喜んでいましたよ」と、心配ご無用と説明したけれど、話は平行線のまま終わった。

大沢専務は、江副浩正社長と東京大学教育学部教育心理学科の同級で、リクルートの創業メンバーの1人である。学究肌で、後に親しくさせてもらって穏やかな人柄と知る

が、その時は強硬だった。

私が80年から90年までいたころの日経ビジネスは、取り上げた企業から、内容が気に入らないと抗議をしばしば受けた。事実関係の間違いは別だが、切り口に関する不満の場合は、よく説明して納得してもらえない。そうした抗議は取材先の率直な声なので、私は臆するどころか歓迎した。

こちらには別に悪意はないし、特定の意図を持って書くわけでもない。取材した結果に基づいて、思う通りに書くだけである。リクルートに対しても同じである。

編集長から「森、リクルートを書いてみないか」と言われるまで、実はリクルートにはあまり興味がなかった。江副社長が日経ビジネスの親会社である日本経済新聞の森田康社

長と東大の同窓で親しいとは聞いていたが、気にしなかった。

当時リクルートは、不動産を派手に買い集め、株式市場でも動きがうわさされていた。どんな実体の企業なのか。過去の雑誌などの記事は、元氣な若い社員たちが引つ張る、情報出版事業の急成長会社という取り上げ方がほとんどである。江副社長は「戦後、東大が生んだ最大の起業家」と、もてはやされていた。

バランスシートを見ると、違う一面が浮かぶ。不動産関係の資産の急増は、銀行借り入れによるものである。総資産が1年で1・65倍に膨れ上がるほど、「大胆な借金経営」をしており、バブル経営のはしりといえた。

記事の結論は、これが自由を求めて始めた江副社長の目指したもので

のか、というトーンでまとめた。「所詮、自転車操業の借金経営」である。「思えば『大きい会社ではなく、良い会社を目指そう』という最初のスローガンを降ろして、『ナンバーワンを目指そう』と言い出した時に、今日が用意されていた」と書いた。

◆意外だった陰気な第一印象

初対面の江副さんの第一印象は意外だった。急成長企業を率いる明るい若手経営者と想像していたが、見事に外れた。49歳の男盛りのはずなのに、生気がなく、陰気で神経質そうな感じがした。質問にぼそぼそと答え、疲れているようにも見えた。

その江副さんが日経ビジネスの記事に、怒り心頭だったらしい。後年、本人から「僕はあなたにああ書かれてカーッとしたけど、今思えば自転

車操業だった。でも、あの頃はそんなことは思わず、絶対にもうまく回ると考えていた」と直接聞いた。

間もなく自ら墓穴を掘るのだが、当時の江副さんは得意の絶頂にあった。友人の森田社長の直系の雑誌と気を許したら、心外にもケチをつけられたと思ったのかもしれない。

しかし結局、告訴もなく、詳細は不明だが何となく収まった。不動産子会社のリクルートコスモスの銀行団の持ち株比率の誤りと、「営業で『数字』を作っている」との表現は誤解を招くので、訂正を出した。

全て片付いて、編集長が本社の森田社長に経緯を報告した。森田社長は「私と江副さんとは友人だが、それとこれとは関係ないことだ」と言ったそうである。江副さんは森田社長にも文句を言いに行ったらしいが、そんな話は私には一切伝わっていない。

江副さんが子会社リクルートコスモスの未公開株を政界から官界、経済界、マスメディアなどまで幅広く譲渡した中の1人に、森田社長も入っていて辞任したことはご存じの通りだ。リクルート事件により、江副さんは贈賄容疑で89年2月13日に逮捕された。

そのとき私は同僚の末村篤記者と

2人で、特集「ケーススタディ リクルート」を日経ビジネス89年3月13日号に書いた。今度は同社の管理職約250人に緊急アンケートを実施して「再び社会の認知を受けるために」という見出しを付けた。

◆リクルート「解体」報道に違和感

88年末から江副さんの取り調べが進む中、報道は一段と過熱し、今にもリクルートが解体したりつぶれたりするかのような論調が目立っていた。坊主憎けりや袈裟まで憎いといった一方的な報道に、違和感を覚えた。社員たちが今何を考えているのか報じたいと、特集を企画した。

そう思ったのは、85年に同社を取材して、有能でしっかりした若い社員がそろっていることを知っていたからだ。特に広報を担当した29歳の藤原和博さんは印象的だった。

大沢専務の抗議の後、1人で私に話を聞きに来た。いろいろ質問して帰ると、他の人から聞いた話では、藤原さんは上の人たちに「日経ビジネスにこう書かれたのは仕方がない」と主張したそうだ。藤原さんは40代で独立して、著述家や教育家などとして活躍している。

再生の道を探る特集を載せた日経ビジネスが出ると、当時あった「週

刊宝石」の記者が取材に来た。「今、みんなでリクルートを追及しているのに、なぜこんな応援するような記事を書けるのか」と言う。日経本社の社長が辞任しているのに、何か裏でもあるのかと言いたげだった。

私は「みんなが左に行ったら、足りない右の情報を報道するのがジャーナリズムだろう。今ごろ、尻馬に乗って、たたいてどうするんだ」と話した。理解したようで、書かれた記事はバランスが取れていた。

江副さんは公判中の92年5月22日、持ち株をダイエーに売却すると発表した。その日、毎日新聞がスクープし、日経に戻って編集委員をしていた私は早朝、本社のデスクに「発表会見にすぐ行ってくれ」と電話でたたき起こされた。

会見のあった日の夜、取材に応じるとの一報を受ける。江副育英会に急いで行くと、久方ぶりの江副さんが開口一番「その節は失礼しました」と言う。私は長いご無沙汰を謝した。「自分の能力以上のことをやりすぎた」などの一問一答は翌日の日経朝刊に入れた。

◆悔恨と解放感がうかがえた

以来、たまに会って雑談をした。2003年に懲役3年執行猶予5年

の判決が確定し、執行猶予も解けると、いちまつの悔恨は残るものの、重荷を下ろした解放感がうかがえた。

持ち株を売却した後、「しばらくはいろんな人の意見を聞いて、何をやるか決めますよ。社員10人くらいの小さな会社で文化的な事業でもやりたいですね」という話もしていた。しかし、ビジネスの表舞台に再び立つことはなかった。

事件のために52歳でリクルート会長を辞して、76歳で亡くなるまで長い余生を余儀なくされた。還暦を迎える頃には「私はもう何もやりません。創業者には墓場まで仕事を持って行くようなタイプがいるけど、僕は森さんと四方山話をしている方がいい」と、冗談で笑わせた。

初対面での暗い印象を話した時、「そうでしょう。影の薄い男だったでしょう。疲れてもいたし、会社のことと頭がいっぱいでしたから」と、はにかむような笑みを浮かべた。全盛期の根暗なカリスマと、晩年のつき物が取れたように穏やかになった自由人のどちらも、本当の「江副浩正」なのだろう。望外の成功で自分を見失って、ある種の万能感にとらわれて失敗した。やはり根は好人物だったからではないかと思う。

(肩書きは当時)

私が会ったあの人

新米金融記者の頃

「悲劇の総裁」佐々木直さん

久保 伸太郎（読売新聞社）

「国民の皆さんに申し訳ないことをしました」。焦点の人は、そう言いつて頭を心持ち下げ、目には涙がにじんでいるように見えた。

この発言を聞いた瞬間、駆け出しの金融担当だった私でさえ、第22代日銀総裁・佐々木直氏の再任はないと確信した。

1974年12月某日深夜、東京・代々木の総裁私邸前。私のほか他社が2、3人。当初は大勢集まっていた。総裁はいったん帰宅しかけたものの、記者がたむろする数に驚いてか、車をUターンさせてどこかに消えた。

他社が諦めて三々五々立ち去る中、待つこと数時間、ようやく現れた総裁は、御酒を召しているようだった。

総裁から直接、一言を聞き出すまで、私は引き揚げられなかった。当日、「次期総裁に森永貞一郎東

証理事長」と他社に抜かれたからである。

佐々木氏は1930年入行。早くから抜てきを含め内外の要職を歴任、69年に満を持して総裁に就任した。

しかし、日銀のプリンスを待っていたのは、日本を取り巻く経済環境の激変。71年のニクソン・ショック、円切り上げに続く過剰流動性の発生、「列島改造論」を引っ下げた田中内閣の登場と景気の過熱。日銀は金融引き締めが遅きに失したと批判されていた。

そこへ、73年秋の第1次石油危機が折からの物価急騰に追い打ちをかけた。トイレットペーパーやワイシャツ、砂糖など白物家庭用品の買い占め騒ぎなど、今では信じられない光景が広がった。

冒頭の総裁発言は、ここにつながる。総裁自ら「申し訳ない」と語るとは……まさかまさかである。

記者にとって、取材対象にどう接触するかは至上命題。日銀総裁といえば、地方勤務を終えたばかりの新米には雲の上の人。まして、超エリート佐々木さんは、日銀幹部ですら近寄り難い存在だった。

キャップが一計を案じた。国際決済銀行（BIS）への加盟（70年）により、海外出張の増えた総裁を羽田空港の貴賓室でつかまえるよう。

押しかけると、すんなり同席を許された。毎回、総裁と、同行する秘書と、総裁の知人と、私。

「やはり、核兵器を持っていないとなあ」。石油危機で大騒ぎの時、空港貴賓室で総裁と向かい合っていると、ドキッとするつばやきが……

「えっ？」と、私は予想もしない総裁の語りかけに、真意を測りかね



日銀総裁として当クラブで3回会見した佐々木直氏（右）。写真は1974年2月15日の昼食会

て質問ができなかった。

「油乞い外交」を展開する日本の姿がどう映っていたのか。推測や想像はできるが、きちんと尋ねなかった以上、私見は慎む。

「世界の中の日本ということです」。74年12月の退任会見で、感想を聞かれた佐々木さんは、こう即答した。

私にはこの言葉が今なお、ずっしりと頭の真ん中に住みついている。大学卒業前年の67年、仲間と手がけた講演会の講師に映画監督の羽仁進氏を招いた。頂戴した演題が「世界の中の日本」だった！

撮影に飛び回ったアフリカ大陸から、遠く日本を見つめての率直な助言だった。

国際舞台に早く登場し、安定成長論者ともいわれた佐々木さんが違う時代に活躍の場を得ていたら、ふと思わなくもない。

以上、ひとつも記事にならなかった老生の記憶談です。

（くぼ・しんたろう 読売新聞東京本社相談役）

次号は伊藤裕造さん（朝日新聞出身）にバトンが渡ります。

笑う101歳×2 笹本恒子 むのたけじ



人生100年時代の映画を 先駆けて

『101歳×2』。奇妙なタイトルであるが、まさにズバリ。人生100年時代の先達に焦点をあて、自由闊達な対談を軸に、2人の警世の考えと暮らしぶりを縦横に描いた。それがそのまま、最先端の現代史に。監督・脚本の河邑厚徳氏も、この映画を『LIFE SHIFT 100年時代の人生戦略』(リンダ・グ

ラットン、アンドリユー・スコット著)を意識してつくったと語る。この本は、昨年末のベストセラー。新しい思想の流れをいち早く映画の世界へ持ち込んだ感覚が鋭い。私は、たまたま『101歳×2』と前後して、街の映画館で『ターシヤ・テューダー 静かな水の物語』を観た。世界中に「スローライフの

母」として知られる女性が、92歳を自然とともに生きた世界である。「人生100年時代」を描いた映画を続けて2つ観たといえる。

むのたけじさん。朝日新聞の大先輩。終戦の日に退社して、反戦平和の志を貫いて知られる。だけでない。記者としての軸足を地方政治に置く私には、週刊新聞「たいまつ」を手に、地域の政治に灯をともし続けたむのさんを、秋田県横手へと訪ねて警咳に接した日が強烈に甦る。

笹本恒子さん。一昨年、横浜での「100歳写真真展」に出かけ、「明治生まれの女性たち」など印象的な作品に感激した。さらに、いまでも毎夜の食事はビフテキと赤ワインです、と説明してくれた会場案内の人の話にも驚いたことだった。

「笑う」が意味をもつ。若い世代に、屈託なく語りかけて、しかも深い味わい。さすが、と感じた。

書き加えたいのは、音楽。すばらしい。作曲家・加古隆氏の作品だ。彼は、『阿弥陀堂だより』(小泉堯史監督)で、音楽部門の2つの賞に輝く。余談だが、私は、この映画を「スローライフ映画」と呼ぶ。

NPOスローライフ・ジャパン理事長

朝日新聞出身 川島 正英
©ピクチャーズネットワーク株式会社
東京都写真美術館ヒューマン・ラスト・シネマ有楽町ほか全国公開中

Life



福島 津波被災を伝えたい 上野さんの6年を追う

東日本大震災の津波で、いまだに行方不明の父と息子を捜す上野敬幸さん(44)と仲間たちの6年にわたる日々を記録した、現在進行形のドキュメンタリーである。

東京電力福島第一原発から北に22キロの福島県南相馬市^{かいほま}萱浜は、太平洋に面した田園地帯。上野さんは農家の長男で、消防団の若手リーダーだ

った。大津波に襲われた地元の救援活動に奔走した夜、両親と10歳の長女、3歳の長男が避難所にいないことに気付く。

翌日、第一原発で最初の水素爆発。政府の退避指示が出て、消防団の仲間と捜索活動が続けた。警察や消防、自衛隊は全く姿を見せない。原発事故のせいで、福島の津波被災地

は置いてきぼりにされていた。

がれきやぬかるみをかき分け、よく見知った近所の人たちの遺体の一つ一つ抱き上げ、集会所に安置した。長女と母も見つかり、弔うことができた。しかし父と長男が見つからない。地区では77人が犠牲になった。

あれからずっと捜し続けている。海辺を歩き、消波ブロックの間をのぞき、砂浜やがれき集積場を掘り返す。わが子を守れなかった悔い。「見つけてやって、抱きしめて、謝りたい」。その一心が体を突き動かした。発言力と行動力に魅せられた人々がボランティアで集まるようになり、「復興浜団」というグループに進化した。全ての不明者を捜し出すと目標を掲げ、活動範囲を広げた。悲しみと絶望の地を笑顔でいっぱいにしようと、春は菜の花畑に迷路を作り、夏は花火大会を開く。

笠井千晶監督も上野さんの魅力に引き寄せられた取材者の一人だ。動機していた名古屋のテレビ局を辞め、密着撮影に専念。夫人や震災後に生まれた次女の心模様にも、丁寧にカメラを向けた。津波と原発事故、福島島の二重被災を知る上で必見の作。

共同通信社原子力報道室長 高橋宏一郎
©2017 Rain field Production

日本記者クラブ 正味財産増減計算書内訳表

自 2016年4月1日 至 2017年3月31日

(単位：円)

科目	公益目的事業会計					収益事業等会計	法人会計	合計
	公1 記者会見等	公2 クラブ賞	公3 会報・HP	共通	小計			
I 一般正味財産増減の部								
1. 経常増減の部								
(1)経常収益								
特 定 資 産 運 用 益		95,870		215,143	311,013			311,013
受 取 会 費				250,778,580	250,778,580		70,732,420	321,511,000
法 人 会 員 会 費 取 入				156,521,040	156,521,040		44,146,960	200,668,000
個 人 会 員 会 費 取 入				53,755,884	53,755,884		15,161,916	68,917,800
賛 助 会 員 会 費 取 入				40,501,656	40,501,656		11,423,544	51,925,200
事 業 収 益						62,843,241		62,843,241
貸 室 料 収 入						39,556,962		39,556,962
飲 食 売 上 割 戻 し						17,053,599		17,053,599
施 設 機 器 賃 借 料						6,232,680		6,232,680
雑 収 益				509	509	166,869	61	167,439
受 取 利 息				509	509	108	61	678
そ の 他 の 雑 収 入						166,761		166,761
受 取 入 会 金				78,000	78,000		22,000	100,000
受 取 寄 付 金				3,000,000	3,000,000			3,000,000
経 常 収 益 計		95,870		254,072,232	254,168,102	63,010,110	70,754,481	387,932,693
(2)経常費用								
事 業 費	172,517,217	16,944,334	38,656,610	55,478,624	283,596,785	44,203,210		327,799,995
借 室 維 持 費	73,765,798			55,478,624	129,244,422	24,382,899		153,627,321
借 室 料	38,440,963			24,025,602	62,466,565	19,220,482		81,687,047
共 益 費	6,846,149			4,278,843	11,124,992	3,423,074		14,548,066
空 調 ・ 光 熱 費	3,478,686			2,174,179	5,652,865	1,739,343		7,392,208
ホ ー ル 専 用 利 用 費	25,000,000			25,000,000	50,000,000			50,000,000
人 件 費	76,708,631	15,018,920	22,246,311		113,973,862	19,265,102		133,238,964
役 員 報 酬	6,800,000	1,360,000	5,440,000		13,600,000			13,600,000
給 与 金	45,962,658	9,247,535	11,098,303		66,308,496	12,839,885		79,148,381
賞 与 ・ 諸 手 当	21,420,227	3,878,200	5,078,124		30,376,551	5,666,870		36,043,421
厚 生 費	323,000	90,000	98,000		511,000	143,000		654,000
退 職 引 当 金 繰 入	2,202,746	443,185	531,884		3,177,815	615,347		3,793,162
事 業 費	20,254,341	1,925,414	16,410,299		38,590,054			38,590,054
会 議 費	1,595,607	61,370	388,673		2,045,650			2,045,650
事 業 運 営 費	17,011,084	654,272	4,143,726		21,809,082			21,809,082
会 報 発 行 ・ H P 運 営 費			10,773,528		10,773,528			10,773,528
ク ラ ブ 賞 実 施 費		942,298			942,298			942,298
運 営 雑 費	384,155	14,775	93,576		492,506			492,506
通 信 費	1,099,770	219,954	879,816		2,199,540			2,199,540
印 刷 費	118,670	23,734	94,936		237,340			237,340
交 通 費	45,055	9,011	36,044		90,110			90,110
減 価 償 却 費	1,788,447				1,788,447	555,209		2,343,656
管 理 費							47,358,943	47,358,943
借 室 維 持 費							18,287,174	18,287,174
借 室 料							14,415,361	14,415,361
共 益 費							2,567,306	2,567,306
空 調 ・ 光 熱 費							1,304,507	1,304,507
人 件 費							11,341,743	11,341,743
役 員 報 酬							2,400,000	2,400,000
給 与 金							4,315,870	4,315,870
賞 与 ・ 諸 手 当							4,321,650	4,321,650
厚 生 費							97,385	97,385
退 職 引 当 金 繰 入							206,838	206,838
そ の 他 の 管 理 費							17,168,885	17,168,885
ク ラ ブ 管 理 費							12,647,044	12,647,044
機 器 備 品 費							263,875	263,875
消 耗 品 費							1,004,168	1,004,168
事 務 委 託 費							1,958,844	1,958,844
事 務 雑 費							663,207	663,207
通 信 費							549,884	549,884
印 刷 費							59,336	59,336
交 通 費							22,527	22,527
減 価 償 却 費							561,141	561,141
経 常 費 用 計	172,517,217	16,944,334	38,656,610	55,478,624	283,596,785	44,203,210	47,358,943	375,158,938
評価損益等調整前当期経常増減額	△172,517,217	△16,848,464	△38,656,610	198,593,608	△29,428,683	18,806,900	23,395,538	12,773,755
当期経常増減額	△172,517,217	△16,848,464	△38,656,610	198,593,608	△29,428,683	18,806,900	23,395,538	12,773,755
2.経常外増減の部								
(1)経常外収益の部								
(2)経常外費用の部								
経 常 外 費 用 計								
当 期 経 常 外 増 減 額								
他 会 計 振 替 額				6,210,318	6,210,318	△6,210,318		
当 期 一 般 正 味 財 産 増 減 額	△172,517,217	△16,848,464	△38,656,610	204,803,926	△23,218,365	12,596,582	23,395,538	12,773,755
一 般 正 味 財 産 期 首 残 高	△305,880,814	△32,840,670	△97,288,012	1,045,926,225	609,916,729	138,172,489	55,668,254	803,757,472
一 般 正 味 財 産 期 末 残 高	△478,398,031	△49,689,134	△135,944,622	1,250,730,151	586,698,364	150,769,071	79,063,792	816,531,227
II 指定正味財産増減の部								
指 定 正 味 財 産 期 首 残 高		46,872,328			46,872,328			46,872,328
指 定 正 味 財 産 期 末 残 高		46,872,328			46,872,328			46,872,328
III 正味財産期末残高	△478,398,031	△2,816,806	△135,944,622	1,250,730,151	633,570,692	150,769,071	79,063,792	863,403,555

貸借対照表 2017年3月31日現在

(単位:円)

科 目	2016年度	2015年度	増 減
I 資産の部			
1.流動資産			
現金預金	56,851,104	45,798,450	11,052,654
仮払金	235,541	250,108	△14,567
立替金	6,529,241	6,347,220	182,021
未収会費	5,859,700	5,747,000	112,700
未収貸室料	1,904,054	2,362,377	△458,323
前払金	11,426,441	11,481,752	△55,311
流動資産合計	82,806,081	71,986,907	10,819,174
2.固定資産			
(1)特定資産			
退職準備積立預金	99,451,997	128,937,036	△29,485,039
特別修繕積立預金	164,973,032	164,973,032	0
特別記念事業積立預金	55,000,000	55,000,000	0
特別システム更新積立預金	25,318,782	62,318,782	△37,000,000
クラブ賞積立預金	210,957,246	210,957,246	0
経営安定化資金積立預金	206,414,561	210,414,561	△4,000,000
特定資産合計	762,115,618	832,600,657	△70,485,039
(2)その他固定資産			
内装設備	4,887,399	5,378,352	△490,953
什器備品	2,333,538	2,878,537	△544,999
ソフトウェア	44,157,811	1,193,389	42,964,422
敷金	75,938,403	75,938,403	0
その他固定資産合計	127,317,151	85,388,681	41,928,470
固定資産合計	889,432,769	917,989,338	△28,556,569
資産合計	972,238,850	989,976,245	△17,737,395
II 負債の部			
1.流動負債			
仮受金	2,049,800	985,100	1,064,700
未払金	7,333,498	9,424,309	△2,090,811
流動負債合計	9,383,298	10,409,409	△1,026,111
2.固定負債			
退職準備引当金	99,451,997	128,937,036	△29,485,039
固定負債合計	99,451,997	128,937,036	△29,485,039
負債合計	108,835,295	139,346,445	△30,511,150
III 正味財産の部			
1.指定正味財産			
指定正味財産合計	46,872,328	46,872,328	0
2.一般正味財産			
一般正味財産合計	816,531,227	803,757,472	12,773,755
正味財産合計	863,403,555	850,629,800	12,773,755
負債及び正味財産合計	972,238,850	989,976,245	△17,737,395

■夏に2つの特別企画
記者研修会と中国取材団

20回目となる記者研修会を8月7日(月)、8日(火)に開催する。この企画は①話題のゲストの昼食会②各社記者によるパネルディスカッション③在京大使館訪問④ベテラン記者の話⑤交流会などで構成される。日常の業務を離れ、横断的な記者同士の交流の場としても活用されており、毎年70人ほどの参加がある。現在、以下のようなプログラムが予定されている。

8月7日▽パネルディスカッション

ン「防災・啓発とメディア」河北新報社が東日本大震災の教訓を生かすために始めた、啓発型・巡回ワークショップ「むすび塾」の活動を報告、同じ趣旨で独自の活動を展開している中日新聞、高知新聞、毎日放送の取り組みを聞く▽「防災交流…宮城県気仙沼市と高知県黒潮町」南海トラフで津波高34メートルの予測を受けた黒潮町は気仙沼市との防災交流が進む。今川悟気仙沼市議会議員と大西勝也黒潮町長から聞く▽交流会

力』を4月に上梓(26ページ参照)▽駐日中国大使館訪問。大使会見と若手外交官との交流
中国への取材団派遣は3回目。今回は「一带一路」をテーマに7月24日から31日の7泊8日を予定している。北京で官庁やシンクタンクから構想の全体像を聞き、陸の「二帯」主要ゲートである新疆ウイグル、海の「一路」のスタート地・福建省アモイ(廈門)を回る。
記者研究会、中国取材団とも詳細が決まる6月下旬に、法人各社へ案内します。多数の参加をお待ちします。

寄贈書

■挑戦する世界の通信社「メディア新時代に(世界の通信社研究会)編集



2160円

通信社は、新聞、テレビなどの報道機関や民間企業にニュースを提供するのを事業とする組織であり、「ニュースの黒子」「ニュースの間屋」などと言われてきた。一般の読者や視聴者の目に直接触れることがなく、その報道活動はあまり知られていない。また、ひと口に通信社と言っても、世界を見渡すと事業形態はさまざま。

本書は、世界の主要な通信社を対象に組織、事業、歴史、編集方針、将来戦略、提携関係などについて詳述している。日本の共同、時事はもとより、欧米、アジア、中東など世界各地の通信社を現地で取材し、それらを基にアップデートな内容としている。特に、ネットメディア隆盛のデジタル時代に通信社がどのように進むべきか各社の幹部にインタビューして話を聞いている点は、興味を引くのではないだろうか。このような世界の各通信社を網羅した書は類例がないと自負している。

倉沢 章夫(新聞通信調査会編集長)

マイ BOOK マイ PR

■記者と権力

滝鼻 卓雄(元読売新聞東京本社社長、元日本記者クラブ理事長)

記者の仕事とは、その使命感いまこそ いま新聞、テレビ、インターネット系メディアを通して、世界や日本の出来事に接していると、どうしてもニュースに対する満足感が得られない。

もちろんニュース現場の記者たちは、懸命に事件に立ち向かい、最適な事実を伝えようとしているだろう。でも隠された事実まで到達していないのでは、と心配をしている。命懸けで取材してほしいといっても、生命を危険にさらすことだけを求めているのではなくて、あらゆる権力に向かって、身体を張って、隠された事実をつかんでほしいと願っている。



早川書房
1620円

言論に対して逆風が吹いているというのであれば、その風に向かって身体を突っ込み、真実をもぎ取ってくるのが記者の仕事。その使命感をいまこそ自覚したい。

情報発信

■安倍晋太郎氏を偲び安倍晋三総理と語る会

安倍晋太郎元外相が亡くなって26年。当時の番記者や関係者などが命日の前後に集まり、ほぼ毎年クラブで偲ぶ会を開催している。安倍晋三首相、昭恵夫人も出席した。(5.15 会場)

■科学ジャーナリスト賞2017贈呈式

科学技術に関する報道や出版、映像などで優れた成果を挙げた個人を表彰している。大賞には中国新聞の連載「グレーゾーン 低線量被曝の影響」(金崎由美・編集局ヒロシマ平和メディアセンター記者、藤村潤平、馬場洋太の両報道部記者)が選ばれた。そのほかの受賞者や贈賞理由は科学ジャーナリスト賞のウェブサイトで見ることができる。(5.16 10階ホール)

■第4回山本美香記念国際ジャーナリスト賞贈賞式・シンポジウム

2012年、シリア取材中に凶弾に倒れた山本美香氏のジャーナリスト精神を引き継ぎ創設された賞。果敢かつ誠実な国際報道につとめた個人を顕彰している。今年度はフォトジャーナリストの林典子氏に本賞を、ジャーナリストで現在もシリアで拘束されているとみられる安田純平氏に特別賞を贈った。贈賞式後はシンポジウムも開かれた。(5.26 10階ホール)

■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBによる定例の勉強会。衛藤晟一・首相補佐官(5.10)、柴山昌彦・首相補佐官(5.17)、浜田靖一・衆院予算委員長(5.31)を招いた。

新しいOB 会員

梶原 英之 1974年毎日新聞入社。大阪・東京両経済部、週刊エコノミスト編集委員、企画事業部長などを務め2009年退社。現在、総合政策研究会事務局長。



毎日の先輩・玉置和宏(故人)の仕事を手伝うためクラブに出入りしていましたが、会員になりました。毎日時代、美術展の仕事をしました。美術展発表の場にクラブの施設を使えません。有料で。

川崎 剛 1980年朝日新聞入社。ナイロビ支局長、朝日新聞アジアネットワーク事務局長、ジャーナリスト学校主任研究員などを務め2014年退社。現在、津田塾大学非常勤講師。



久しぶりに「アラスカ」でカレーを食べている途中で、クラブに再入会することを思い付きました。外国人特派員協会と異なり、皆さんが背広姿で身なりがいいので少し敷居は高いのですが。

神原 哲也 1982年日本経済新聞入社。東京流通経済部デスク、テレビ東京経済部、本社電波・電子戦略室(現・電波本部)、日経グローバル主任研究員などを務め2016年退社。



早期定年退職して大学院などで企業経営を学んでいます。その知見も加えて情報発信の仕事もしていきたいと思っています。

鈴木 美勝 1975年時事通信入社。ニューヨーク総局長、解説副委員長、JANET編集長、専門誌『外交』編集長などを務め2017年退社。



42年間走ってきましたが、ジャーナリスト人生の転機。立ち止まって振り返る勇気をもって生きたい。事務局の皆さま、引き続きお世話になります。

平田 育夫 1974年日本経済新聞入社。ワシントン支局、「日経ビジネス」編集長、経済部長、論説委員長、コラムニストなどを務め2017年退社。



退社後も経済政策を中心にオンラインメディアなどに書きたいと思っています。日本記者クラブでの会話は貴重な情報源です。

安井 孝之 1988年朝日新聞入社。大阪・東京両経済部、編集委員などを務め2017年退社。現在、Gemba Lab代表取締役。



小さな会社をつくり、フリー記者として活動を始めました。現場にこだわり、現場で起きているイノベーションを伝えていきます。

レストラン*価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 水無月懷石 (6/30まで)

先付：くみ上げ湯葉、穴子小袖寿司、トマトチーズ射込み お椀：鰻葛打ち 造り：鰯うす造り 他 焼物：鮎塩焼き 煮物：茄子オランダ煮 揚げ物：鮎魚女香味揚げ 食事：稲庭うどん 水菓子：季節の果物 グラス冷酒付き (5,400円)

(板長：大井由光)

洋食 おすすめコース (7/1まで)

イサキのカルパッチョ・柑橘ソース、ヴィシソワーズ(冷製クリームスープ)、牛フィレ肉とホワイトアスパラガスのチーズ焼き、マンゴームース、パン、コーヒーフキ (3,780円)。ランチ、ディナー(土曜日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。(シェフ：黒須修一)

アラスカ この夏も半額サービス

毎年好評をいただいている夏の会員向け割引サービスをご案内します。10階のレストラン・アラスカで、ディナータイムの一般メニューを全て半額で提供します。期間は8月2日(水)から31日(木)(土日祝を除く)。お仲間、ご家族などでお楽しみください。ご利用の際は予約(03-3503-2766)をお願いします。

ラウンジの改善案をお寄せください

ラウンジは会員の皆さんの憩いの場であり、活動の拠点でもあります。受付脇に「ご意見箱」を設置しましたので、改善点やご意見をお寄せください。メール(jimukyoku@jnpc.or.jp)でも構いません。お待ちしております。

来室の際は受付で署名をお願いします

クラブへお越しの際は必ず受付で署名をお願いします。待ち合わせで後からおいでになる方や、伝言などの連絡にも必要ですので、ご協力ください。

会合参加は事前にお申し込みを

会見場の設営や資料の準備は申し込み人数を参考にしてありますが、用意した席や資料が足りなくなる会合が増えています。なるべく前日までにお申し込みいただくようお願いいたします。

ウェブサイトから簡単に登録できるほか下記でも受け付けます。

メール：kaiken@jnpc.or.jp ファクス：03(3503)7271



HP更新情報

<http://www.jnpc.or.jp/>

音声アーカイブ(日付は会見日) 重要会見の音声録音

● 銭其琛・中国副首相兼外相 (1996.4.2)

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階) ☎ 3503-2723
- 洋食レストラン(10階) ☎ 3503-2766
- 貸室予約・宴会打ち合わせ ☎ 3503-2724
- 受付 ☎ 3503-2721
- 会員事務 ☎ 3503-2727
- 経 理 ☎ 3503-2728
- クラブ行事への申し込み ☎ 3503-2722
- 会見申し込みアドレス kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：134社 ● 基本会員：748人 ● 個人会員：1,264人
- 法人・個人賛助会員：62社・136人 ● 特別賛助会員：101人
- 名誉・功労会員：11人 ● 学生会員：119人

計：196社・2,379人

第107回ゴルフ会

5月23日、磯子カンツリークラブで第107回ゴルフ会が開催されました。勝利を勝ち取った小嶋健史会員の喜びの声です。

冷や汗の優勝

快晴、強風の中、パットで拾ってなんとか初優勝できました。「ホームコースで負けたら恥」の恐怖心と同伴の竹内實昭さん、塚越喜昭さんの励ましのたまものです。お世話になった羽佐間正雄さんの本を参加者全員が頂戴し、次回日程を10月17日と決め幕となりました。

小嶋健史(日本経済新聞出身)



中村登紀夫会員が自作花瓶を寄贈



「僕はね、16歳なんですよ」。TBS出身の中村登紀夫会員は、そう言いながら高さ25センチほどの花瓶を袋から取り出した。

70歳の時、民放クラブが開いている陶芸教室に通い始めた。それから16年。今も創作意欲は衰えない。普段は湯飲みなどを中心に作っているという中村さん。「これは大き過ぎて…。家に置いておくよりクラブのバーカウンターを彩る一助になればハッピーです」と、花瓶『宙』をクラブに寄贈した。

JR九州が入会しました

日本初の豪華クルーズトレイン「ななつ星in九州」の運行などを行っているJR九州が法人賛助会員として入会しました。登録会員は下記の方々です。

山根久資 広報部長

上符友則 東京支社長

<法人会員代表変更>

TBSテレビ 武田信二代表取締役社長(旧・井上弘氏)

<訃報>

海野修太郎会員(日本テレビ出身、85歳)が5月21日死去されました。ご冥福をお祈りします。

今後の行事予定(6/5現在)

23金	14:00～15:30 10階ホール 「北朝鮮の核とミサイル」⑦ 道下徳成・政策研究大学院大学教授
-----	---

会報委員会(今号まで担当)

委員長＝飯塚 浩彦
委員＝稲沢 裕子 井上 洋一 大辻 一晃
大寺 廣幸 鈴木 仁 長崎 和夫
藤井 良広 藤澤 秀敏 吉澤 正一
渡辺 大祐

(事務局：長谷川和子 村田 茜)

☎ 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：松本 健吾^{まつもと けんご} (産経新聞東京本社写真報道局)



水浴びするルリカケス＝鹿児島県龍郷町 奄美自然観察の森

バードウォッチング

数十年ぶりに上野動物園へ行った。目当てはパンダではなく、パンダ舎そばの野鳥コーナー。3月に国立公園になったばかりの奄美群島の固有種で、天然記念物のルリカケスが飼育されているからだ。上野と鹿児島動物園にしかない。掲載写真と見比べているうち、尊敬する先輩記者から時折送られてくるカワセミのダイビングの写真がダブってきた。羽の美しさではルリカケスとカワセミが日本の野鳥の双璧だと思う。

バードウォッチングは欧米では紳士の趣味といわれる。1975年に来日したシュレジンジャー米国防長官は離日前日に軽井沢に飛び、バードウォッチングに興じた。シュレジンジャーはキッシンジャー大統領特別補佐官とハーバード大学の同期で、ニクソン大統領に請われ学者生活からホワイトハウス入りし、CIA長官を経て国防長官となった。しかしニクソン大統領はウォーターゲート事件で辞任に追い込まれ、副大統領のフォードが昇格した。シュレジンジャーが日本に来たときはフォード政権になっていたが、訪日3カ月後の11月に外交・安保路線でキッシンジャーと対立し、フォードから解任されている。

今、トランプ大統領はロシア疑惑で、崖っぷちに立つ。ニクソンがウォーターゲート事件発覚から弾劾必至とみて辞任するまで2年かかったが、ロシアゲートは始まったばかり。ニクソンを追いついたのはワシントンポストを筆頭にしたマスメディアの放列。トランプ氏は、それらを敵視している。

さて、トランプ氏の命運やいかに。ルリカケスとカワセミがオーバーラップするなどと、ノー天気なことを言っておれない。

(長崎 和夫)

2016年度事業報告(概要)

*全文はウェブサイトに掲載しています

■タイムリーな会見、企画、取材団派遣を積極的に実施

公益社団法人日本記者クラブは2016年度、合計223回のプレス向け行事(オン・ザ・レコードの記者会見、昼食会、討論会・対論、研究会、記者ゼミ、記者研修会、取材団)を主催した。一般行事などを加えた行事の総数は249回だった。



16年度は討論会、パネルディスカッションの開催やタイムリーな会見・企画の設定、取材団・プレスツアーの積極的な派遣に力を入れた。

注目を集めた都知事選では立候補予定者4人の共同会見を開催。当選後の小池百合子都知事会見には208人が参加、築地市場の移転問題では石原慎太郎都知事の会見も行い383人が参加、テレビ各局が生中継した。参議院選挙の公示前日には、主要9党の党首を招いて討論会を行った。これらの会見はテレビ・ラジオが生中継を行い新聞も詳細に報道した。

外国要人では、アウンサンスーチー・ミャンマー国家顧問兼外相が見が290人を集める大型会見となったほか、「パナマ文書」で租税回避疑惑を報道されたポロシエンコ・ウクライナ大統領会見にも内外記者197人が集まった。

昨年度に続いて長期シリーズ企画やタイムリーな短期企画を多数開催した。米大統領選投票までは前年度から続く「変わるアメリカ 変わらないアメリカ 米大統領選」を継続、選挙後には「トランプ政権…米国と世界の行方」をスタートさせた。経営の変革に取り組む企業人を招く「チェンジ・メーカーズに聞く」や、日本の国連加盟60年を機に始めた「国連と日本人」も回を重ねて注目された。

4年目を迎えた記者ゼミは「次世代ジャーナリストの必須IT講座」として、コンピュータのスキル向上を目指した。各社の記者が入れ替わりで講師を務め、社を横断して知識・技術の共有を図った。さらに、各社の新入社員研修担当者を対象にしたコンピュータの「セキュリティセ

ミナー」を初めて行った。

恒例の記者研修会も開催。原発立地県・地元メディアによるパネルディスカッションのほか韓国大使館訪問、小泉進次郎衆院議員会見、中村哲ベシヤワール会現地代表によるアフガニスタン復興支援の現地報告、「パナマ文書」スクープに携わった記者の話など幅広い企画が並んだ。

取材団、プレスツアーも積極的に行い、実施回数は過去最多の計9回となった。海外では「中国取材団」「フランス・スイス エネルギー取材団」を、国内では「熊本取材団」や「沖縄与那国・石垣取材団」「福島第一原子力発電所取材団」「岩手・宮城・福島」への被災地取材団などを企画した。



16年度の日本記者クラブ賞は、読売新聞東京本社文化部長の尾崎真理子氏に贈り、特別賞はジャーナリストの堀川恵子氏に贈った。



17年1月、日本記者クラブ・ウェブサイトを6年ぶりにリニューアルした。併せて、会員データベース、会見関連情報の一元管理を始めた。このリニューアルで、ウェブサイトと会報との連携がさらに強化され、両媒体の特性を生かした多様で幅広い情報発信を行うことが可能になった。会報の「会見レポート」は毎月のゲストの中から数人をピックアップして掲載することで紙面のメリハリがつき、ウェブサイトは字数制限がないためゲストの分野の専門記者による詳細なレポートを掲載することができるようになった。

ユーチューブの日本記者クラブチャンネルで公開している会見動画の累計は1461本となった。



第591回理事会は会費規則を改定し、個人D会員の会費(月額6100円)を17年度から5000円に引き下げることを選定した。



17年3月31日現在での会員数は、法人会員134社(対前年比増減なし)、法人賛助会員62社(同マイナス3社)、会員総数2416人(同マイナス83人)。

行事リスト

*「詳」はウェブサイト全文文字起こし(会見詳録)を掲載

開催日 参加者 記録

討論会、パネルディスカッション、対論

4回

【放送法を考える】浅田次郎 作家、日本ベンククラブ会長/岸博幸 慶応大学教授(メディア学、元経産省/西土彰一郎 名城大学教授(憲法)/山田健太 専修大学教授(言論法)、日本ベンククラブ常務理事)

4月1日

128

詳

【9党党首討論会】自由民主党 安倍晋三総裁/民進党 岡田克也代表/公明党 山口那津男代表/日本共産党 志位和夫委員長/おおさか維新の会 片山虎之助共同代表/社会民主党 吉田忠智党首/生活の党と山本太郎となかまたち 小沢一郎代表/日本のこころを大切にする党 中山恭子代表/新党改革 荒井広幸代表

6月21日

281

詳

【都知事選立候補予定者共同会見】宇都宮健児氏/小池百合子氏/鳥越俊太郎氏/増田寛也氏

7月13日

303

詳

【民進党代表選立候補者討論会】蓮舫議員/前原誠司議員/玉木雄一郎議員

9月2日

209

詳

記者会見、昼食会、研究会

190回

ティム・ヒッチنز 駐日英国大使

4月4日

78

詳

渡辺将人 北海道大学大学院准教授【変わるアメリカ 変わらないアメリカ 米大統領選4】

4月4日

59

詳

村田晃嗣 同志社大学教授【安保法施行と日本の防衛4】

4月5日

40

詳

ベトロ・ポロシエンコ ウクライナ大統領伊藤正直 東京大学大学院名誉教授、大妻女子大学教授【どうみるマイナスイノベーション】

4月6日

86

詳

山岡耕春 名古屋大学大学院教授【南海トラフ地震1】

4月8日

50

詳

木村玲欧 兵庫県立大学准教授【南海トラフ地震2】

4月8日

41

詳

ギンテル・スレーワージェン 駐日ベルギー大使

4月11日

129

詳

アンヘル・グリア OECD事務総長

4月11日

139

詳

達増拓也 岩手県知事【3・11から5年】

4月13日

48

詳

渡邊啓貴 東京外国語大学教授【揺らぐ欧州】

4月14日

72

詳

ティエリー・ダナ 駐日仏大使

4月15日

52

詳

渡部正樹 国連人道問題調整事務所(○CHIA)神戸事務所長／白石和子 外務省女性・人権人道担当大使／長有紀枝 認定NPO法人ジャパン・ブラットフォーム理事【世界人道サミットに向けて】春名幹男 早稲田大学大学院客員教授【変わるアメリカ 変わらないアメリカ米大統領選5】	4月18日	61
シモナ・レスコヴァル 駐日スロベニア大使	4月19日	20
中本和洋 日弁連会長	4月21日	33
松岡由季 国連国際防災戦略事務局(UNISDR) 駐日事務所代表【国連と日本人7】	4月22日	29
ハオリヤン・シユウ 国連事務次長補(国連開発計画(UNDP)アジア太平洋局長山口豪 日産自動車副社長【チェンジ・メーカーズに聞く4】	4月22日	26
平井久志 立命館大学客員教授【金正恩体制をどうみるかー労働党大会を前に】松中権 認定特定非営利活動法人グッド・エイジング・エールズ代表【LGBTと社会1】	4月26日	86
広瀬道明 東京ガス社長【チェンジ・メーカーズに聞く5】	4月28日	18
渡辺靖 慶応大学教授【変わるアメリカ 変わらないアメリカ 米大統領選6】	4月28日	86
河野真理子 早稲田大学法学学術院教授【南シナ海の領有権問題】	5月9日	72
井山裕太 囲碁七冠	5月12日	67
カリン・フォン・ヒッペル 英国王立防衛安全保障研究所(RUSI)所長	5月13日	71
ダレン・フクシマ 元米通商代表部日本担当部長【変わるアメリカ 変わらないアメリカ 米大統領選7】	5月16日	89
稲場雅紀 国際NGOネットワーク「動く↓動かす」事務局長／西井和裕 名古屋NGOセンター理事長／根本かおる 国連広報センター所長【SDGsと市民社会1 G7伊勢志摩サミットに向けて】	5月17日	51
セイエッド・アッバス・アラグチ イラン外務次官	5月18日	86
田中熙巳 日本原水爆被害者団体協議会事務局長【オバマ広島訪問1】	5月19日	43
松尾文夫 元共同通信ワシントン支局長【オバマ広島訪問2】	5月19日	63
バーバラ・ヘンドリクス 独環境・自然保護・建設・原子力安全相	5月20日	53
秋葉忠利 前広島市長【オバマ広島訪問3】	5月20日	65
	5月23日	45

林成蔚 常葉大学教授【蔡英文の台湾1】	5月23日	65
野口健 登山家【熊本報告1】	5月30日	45
フィラデルフィア管弦楽団【もうひとつの日本8】	6月1日	95
武内和彦 国連大学上級副学長【国連と日本人8】	6月2日	39
榛沢和彦 医師(新潟大学)【熊本報告2】	6月2日	37
堀坂浩太郎 上智大学名誉教授【リオ五輪を控えてどこへいくブラジル大統領弾劾裁判に発展した政治経済情勢】	6月3日	49
浅川雅嗣 財務官【パナマ文書1】	6月3日	37
奥山俊宏 朝日新聞編集委員／澤康臣 共同通信特別報道室次長【パナマ文書2】	6月6日	115
横江公美 元米ヘリテージ財団上級研究員【変わるアメリカ 変わらないアメリカ 米大統領選8】	6月9日	88
野上義二 国際問題研究所理事長兼所長(元駐英大使)【Brexit】	6月10日	87
太田資暁 NPO法人江戸城天守を再建する会会長／三浦正幸 広島大学教授	6月10日	78
村木真紀 虹色ダイバーシティ代表【LGBTと社会2】	6月13日	30
仲谷栄一郎 弁護士(アンダーソン・毛利・友常法律事務所【パナマ文書3】	6月13日	64
野口元郎 国際刑事裁判所(ICC)被害者信託基金理事長	6月14日	51
ヘレン・クラーク 国連開発計画(UNDP)総裁	6月15日	15
平原弘子 国連南スーダンミッション・ベンティウ事務所長【国連と日本人9】	6月16日	32
吉川洋 財務省財政制度審議会会長(立正大学教授)【消費増税再延期と日本の財政】	6月16日	35
米川正子 立教大学特任准教授／華井和代 東京大学大学院特任助教【「女を修理する男」試写会】	6月17日	61
柳興洙 駐日韓国大使	6月17日	64
小城武彦 日本人材機構社長【チェンジ・メーカーズに聞く6】	6月17日	75
森重昭さん／伊吹由歌子さん／「Paper Lanterns 灯籠流し」上映【原爆と犠牲になった米兵捕虜】	6月24日	46
中国海洋問題専門家代表団 呉士存 中国南海研究院院長(团长)／于鉄軍 北京大学国際戦略研究院副院長、副教授／張新軍 清華大学法学院副教授	6月24日	70
松田康博 東京大学教授【蔡英文の台湾2】	6月24日	75
原田謙介 NPO法人YouthCreate代表【18歳選挙権】	6月27日	31

アントワニス・レリス 仏ジャーナリスト【著者と語る『ぼくは君たちを憎まないうことになった』】	6月28日	62
阿部菜穂子 英国在住ジャーナリスト【著者と語る『チェリー・イングラム 日本桜を救ったイギリス人』】	6月28日	33
平田直 東京大学地震研究所首都圏研究センター長【熊本の教訓と首都の備え】	6月29日	77
民間税調会 三木義一 青山学院大学学長(座長)／青木文 税理士／田中秀明 明治大学教授／戸田智彦 弁護士／水野和夫 法政大学教授	6月30日	49
ティム・ヒッチンズ 駐日英国大使【BrexitとEUの未来1】	7月1日	109
核軍縮検証のための国際パートナーシップ(IPNDV) フランク・ローズ米国防務次官補／米シンクタンク「Nuclear Heat Initiative」アンドリュ・ピエニアウスキ副会長／相川一俊 外務省軍縮不拡散・科学部長／ディビッド・チェンバーズ 英外務省上級首席研究分析官【WG1共同議長／不拡散局長(WG2共同議長)／ミシェル・スミス米エネルギー省核検証室課長補佐(WG3共同議長)】	7月1日	52
アヴィ・ハッソン イスラエル経済産業省チーフ・サイエンティスト	7月5日	22
黒川光博 虎屋社長【チェンジ・メーカーズに聞く7】	7月5日	45
ヴィオレル・イステイチョアイア・ブドゥラ 駐日EU大使【BrexitとEUの未来2】	7月5日	53
ハンス・カール・フォン・ヴェアテルン 駐日独大使／ティエリー・ダナ 駐日仏大使【BrexitとEUの未来3】	7月6日	92
石川康晴 ストライプインターナショナル社長【チェンジ・メーカーズに聞く8】	7月6日	32
梅原季哉 朝日新聞編成局長補佐／鶴原徹也 読売新聞編集委員【BrexitとEUの未来4】	7月7日	59
下地輝司 東京都危機管理監【首都直下地震への備え】	7月8日	58
西田亮介 東京工業大学准教授【参院選後の日本 民意を読む1】	7月11日	46
松本正生 埼玉大学教授【参院選後の日本 民意を読む2】	7月14日	60
山城紀子 ジャーナリスト【沖縄から考える11】	7月14日	32
玉田芳史 京都大学大学院教授【タイ情勢】	7月15日	35

アフメト・ビュレント・メリチ 駐日トルコ大使	7月20日	81
琉球大学教授【沖縄から考える12】	7月21日	61
小和田恒 国際司法裁判所（ICJ）判事	7月25日	64
茂木崇 東京工芸大学専任講師【著者と語る『デジタル・ジャーナリズムは稼げるか？メディアの未来戦略』】	7月26日	85
クライド・プレストウィッツ 米経済戦略研究所所長	7月26日	57
山下真理 国連平和構築支援事務所次長【国連と日本人10】	7月28日	27
開沼博 立命館大学衣笠総合研究機構准教授／竜田一人 漫画家／吉川彰浩 一般社団法人AFW代表【著者と語る『福島第一原発廃炉図鑑』】	7月28日	60
裴宰徹（ペー・チュエヨル） 韓国テノール歌手／輪嶋東太郎 ヴォイス・ファクトリー代表取締役／一色信彦 京都大学名誉教授／「ザ・テノール 真実の物語」上映	8月1日	62
黒田順子 米マーシー大学客員教授【国連と日本人11】	8月2日	25
アンドレ・コヘア・ド・ラゴ 駐日ブラジル大使	8月5日	60
大野恒太郎 検事総長（記者研修会プログラム）	8月25日	128
中村哲 ベシヤワール会現地代表（記者研修会プログラム）	8月26日	95
メフメト・シムシエキ トルコ副首相	8月26日	38
五百旗頭真 アジア調査会会長／川島真 東京大学教授／宮本雄二 元中国大使【中国とどうつきあうか14】	8月29日	141
飯山雅史 北海道教育大学教授【変わるアメリカ 変わらないアメリカ 米大統領選9】	9月1日	60
小池百合子 東京都知事	9月6日	208
井上洋士 Futures Japanプロジェクト代表／高久陽介 日本HIV陽性者ネットワークJANP+代表【HIV／エイズ】	9月7日	20
多谷千香子 法政大学教授【著者と語る『アフガン・対テロ戦争の研究』】	9月8日	51
前嶋和弘 上智大学教授【変わるアメリカ 変わらないアメリカ 米大統領選10】	9月9日	57
加藤聖文 国文学研究資料館准教授【海外引き揚げ70周年―体験の継承】	9月12日	45

詳

中国経済学者代表団 周強武 財政部国際財経センター主任（团长）／張宇燕 社会科学学院世界政治研究所所長／畢吉耀 国家発展改革委員会対外経済研究所所長／趙晋平 國務院発展研究センター対外経済研究所所長／劉尚希 財政部財政科学研究院院長	9月13日	59
根本とおる 国連広報センター所長【国連と日本人12】	9月23日	45
オーウェン・マーフィー アイルランド金融サービス・電子政府公的調達担当相	9月26日	25
星野佳路 星野リゾート代表【チェンジー・メーカーズに聞く9】	9月26日	71
徳重徹 テラドローン社長【チェンジー・メーカーズに聞く10】	9月28日	31
大江博 TPP首席交渉官	9月29日	72
平野俊夫 量子科学技術研究開発機構（QST）理事長	9月30日	25
金田秀昭 岡崎研究所理事【北朝鮮の核とミサイル1】	9月30日	82
植木安弘 上智大学教授【国連と日本人13】	10月3日	28
井上康生 リオ五輪日本柔道男子監督	10月5日	52
会田弘継 青山学院大学教授【変わるアメリカ 変わらないアメリカ 米大統領選11】	10月5日	70
倉田秀也 防衛大学校教授【北朝鮮の核とミサイル2】	10月6日	88
門間一夫 みずほ総研エグゼクティブエコノミスト【日銀検証】を検証する1】	10月11日	70
森信親 金融庁長官	10月12日	84
中国外交専門家グループ 金燦榮 中国人民大学国際関係学院副院長／虞少華 中国国際問題研究院研究員／王星宇 中国人民大学国際関係学院副教授	10月14日	55
ベルナル・ビゴ 国際熱核融合実験炉ITER機構長	10月14日	53
上川あや 世田谷区議【GBTと社会3】	10月20日	25
マイケル・カービー 北朝鮮における人権に関する国連調査委員会元委員長	10月20日	45
平井伸治 鳥取県知事	10月20日	60
白井さゆり 慶応大学教授【日銀検証を検証する2】	10月21日	66
ベルフェクト・ヤサイ 比外相／エルネスト・アベリヤ 比大統領報道官	10月26日	120
トルン紀美子さん／ピレキ代美さん／武田里子 大阪経済法科大学客員研究員【海外に住む日本人と複数国籍】	10月27日	40

詳

ガブリエル・ドゥケ 駐日コロンビア大使	10月28日	19
ユッカ・シウコサリ 駐日フィンランド大使	11月1日	51
ブルース・ストークス 米ビュリーサイチセンター国際経済世論調査部ディレクター【変わるアメリカ 変わらないアメリカ 米大統領選12】	11月1日	68
須田美矢子 キヤノングローバル戦略研究所特別顧問【日銀検証】を検証する3】	11月2日	51
高津克幸 にんべん社長【チェンジー・メーカーズに聞く11】	11月2日	46
呉屋新城春美 ブラジル日本文化福祉協会会長【沖縄から考える13】	11月2日	31
会田善一 ミヤンマー国家顧問兼外相	11月4日	290
朴柱奉 バドミントン日本代表監督	11月7日	28
東山篤規 立命館大学教授（イグ・ノーベル賞受賞者）	11月9日	41
永易至文 NPO法人パープル・ハンズ事務局長・行政書士【GBTと社会4】	11月10日	17
グレン・フクシマ 米先端政策研究所上席研究員【変わるアメリカ 変わらないアメリカ 米大統領選13】	11月11日	71
AP通信社ビュリツァー賞受賞者 テッド・アンソニー アジア太平洋ニュースディレクター／エスター・トゥサン ミヤンマー特派員／マジリ・メイソン アジア特派員（駐ジャカルタ）／マーサ・メンドーザ アジア調査報道記者（駐バンコク）	11月11日	60
渡部恒雄 東京財団上席研究員【変わるアメリカ 変わらないアメリカ 米大統領選14】	11月14日	72
平岩俊司 関西学院大学教授【北朝鮮の核とミサイル3】	11月14日	62
高見澤将林 前内閣官房副長官補事 慰対処・危機管理担当【変わるアメリカ 変わらないアメリカ 米大統領選15】	11月16日	73
横田耕一 九州大学名誉教授【生前退位を考える1】	11月16日	48
川鍋一朗 日本交通会長【チェンジー・メーカーズに聞く12】	11月16日	61
川端清隆 福岡女学院大学教授【国連と日本人14】	11月18日	32
山口泰 元日銀副総裁【日銀検証】を検証する4】	11月21日	70
坂口裕彦 前毎日新聞ウィーン特派員【著者と語る『ルポ 難民追跡 パルカンルートを行く』】	11月22日	33

詳

詳 詳

フアティ・ピロル 国際エネルギー機関 (IEA) 事務局長	11月25日	52
国連財団 キヤシー・キャルビン会長／スライザン・メイヤーズ上席副会長／小和田恒理事 (国際司法裁判所判事)【国連の持続可能な開発目標と日本の民間部門の役割】	11月28日	26
柴田悠 京都大学大学院准教授【著者と語る「子育て支援が日本を救う」】	11月28日	42
川人博 弁護士【働き方改革を問う1】	11月29日	59
フィリップ・グランディ 国連難民高等弁務官	11月29日	49
中尾武彦 アジア開発銀行 (ADB) 総裁	12月1日	61
スジャン・チノイ 駐日インド大使	12月1日	50
ポール・シェアード S & P グローバルエグゼクティブ・バイス・プレジデント	12月2日	45
兼チーフ・エコノミスト		
坂口正芳 警察庁長官	12月5日	54
奥蘭秀樹 静岡県立大学准教授【朴槿恵大統領が辞意―大揺れの韓国社会】	12月5日	74
大島賢三 元国連大使【国連と日本人15】	12月6日	30
フレディ・スヴェイネ 駐日デンマーク大使／ユッカ・シウコサリ 駐日フィンランド大使／ハンネス・ヘイミソン 駐日アイスランド大使／アリン・リメスタ 駐日ノルウェー大使／マグヌス・ローバック 駐日スウェーデン大使【北欧のいま 5カ国駐日大使に聞く】	12月7日	80
辻哲夫 元厚労事務次官【2025年問題 現状と展望―柏プロジェクトからの発信】	12月8日	53
横倉義武 日本医師会会長	12月9日	31
石田勇治 東京大学大学院教授【ヒトラーとは何者だったのか】	12月9日	78
世耕弘成 経済産業相兼ロシア経済分野協力担当相	12月12日	120
李燦雨 帝京大学講師【北朝鮮の核とミサイル4】	12月15日	52
四家千佳史 コマツ執行役員・スマートコンストラクション推進本部長【チェンジ・メーカーズに聞く13】	12月16日	33
クリスティーナ・デビビス 米プリンストン大学教授【トランプ政権…米国と世界の行方1】	2017年1月6日	108
尾崎久仁子 国際刑事裁判所 (ICC) 第二次長	1月11日	31
矢嶋康次 ニッセイ基礎研究所経済研究部チーフエコノミスト【2017年経済見通し1】	1月13日	79

頼清徳 台南市長	1月16日	67
渡辺博史 国際通貨研究所理事長【2017年経済見通し2】	1月17日	87
工藤律子 ジャーナリスト【著者と語る「マラス 暴力に支配される少年たち」】	1月24日	16
郭四志 帝京大学教授【中国の対外経済戦略】	1月25日	72
「俳句をユネスコ世界無形文化遺産に―四俳句協会会長会見 有馬朗人 国際俳句交流協会会長／鷹羽狩行 俳人協会会長／宮坂静生 現代俳句協会会長／稲畑汀子 日本伝統俳句協会会長／岡本栄 三重県伊賀市長 (芭蕉生誕地)」	1月26日	72
マイケル・オレン イスラエル首相府副大臣 (外交担当)	2月2日	65
山田久 日本総研調査部部長・チーフエコノミスト【働き方改革を問う2】	2月3日	65
加藤勝信 働き方改革担当大臣	2月6日	56
漆紫穂子 品川女子学院校長【チェンジ・メーカーズに聞く14】	2月13日	37
山口絵理子 マザーハウス代表【チェンジ・メーカーズに聞く15】	2月15日	30
田中均 日本総研国際戦略研究所理事長／ピーター・ランダーズ ウォールストリート・ジャーナル東京支局長【トランプ政権…米国と世界の行方2】	2月20日	131
河野龍太郎 BNPパリバ証券経済調査本部長【2017年経済見通し3】	2月21日	72
ジャスパー・チャン アマゾンジャパン社長【チェンジ・メーカーズに聞く16】	2月22日	82
中林美恵子 早稲田大学准教授【トランプ政権…米国と世界の行方3】	2月23日	92
内海学 元財務官【トランプ政権…米国と世界の行方4】	2月24日	52
チャールズ・フラナガン アイルランド外務・貿易大臣	3月1日	21
ウィリアム・レイシー・スウィング 国際移住機関 (IOM) 事務局長	3月2日	32
福田円 法政大学准教授【トランプ政権…米国と世界の行方5】	3月2日	60
松尾豊 東京大学大学院工学系研究科特任准教授【AIと日本企業の競争力】	3月3日	62
石原慎太郎 元東京都知事	3月3日	383
エスペン・ルンデ・ラーセン デンマーク環境・食糧相	3月6日	38
澤田秀雄 エイチ・アイ・エス会長・社長【チェンジ・メーカーズに聞く17】	3月8日	70
ポール・マデン 駐日英国大使	3月9日	63

詳

内堀雅雄 福島県知事	3月9日	65
宮坂学 ヤフー社長【チェンジ・メーカーズに聞く18】	3月10日	63
永野健二 ジャーナリスト【著者と語る「バブル―日本迷走の原点―」】	3月15日	70
古川勝久 国連北朝鮮制裁委員会専門家パネルメンバー【北朝鮮の核とミサイル5】	3月16日	62
武井彩佳 学習院女子大学准教授【著者と語る「和解」のリアルポリティクス―ドイツ人とユダヤ人―】	3月16日	34
ティエリー・ダナ 駐日仏大使／ハンス・カール・フライヘア・フォン・ヴェアテルン 駐日独大使／アルト・ヤコビ 駐日オランダ大使	3月17日	82
川田達男 セーレン会長【チェンジ・メーカーズに聞く19】	3月17日	50
フェリペ・ハラミージョ コロンビア貿易振興機構総裁	3月22日	25
中国経済学者代表団 周強武 財政部国際財経センター主任 (団長)／樊綱 中国総合開発研究院院長、中国人民銀行貨幣政策委員会委員／趙晋平 國務院発展研究センター対外経済研究部部長／畢吉耀 中国マクロ経済学研究部部長／劉尚希 財政部財政科学研究院院長	3月28日	61
飯島勲 内閣官房参与 (特命担当)【日本政治を読み解く】	3月30日	130

詳

【スクレイピング】田中孝憲 報知新聞社 メディア戦略局編集部	10月4日	20
【arcGIS紹介】藤澤秀行 ESRRI ジャパン取締役、宇田川藍 ジャックジ ヤパン取締役ほか	10月18日	33
【Python入門】松波功 中日新聞電 子編集部	11月1日	19
【デジタイジング】山本智 NHK報道局 ネット編集部チーフプロデューサー	11月15日	18
【JavaScript入門とd3.js】 松波功 中日新聞電子編集部	12月6日	23
【機械学習】多田哲馬 読売新聞東京本 社メディア局企画開発部	1月17日	19
【スポーツ報道セミナー】田中孝憲 報知 新聞社メディア戦略局編集部	1月24日	21
【ジャーナリストのデータリテラシー】萩 原雅之 トランスコスモス・アナリティ クス株式会社取締役副社長	2月7日	22
【欧米のデータジャーナリズムと編集局の デジタル移行】ジョン・バーン・マード ック 英フイナンシャル・タイムズ	2月7日	37
【セキュリティセミナー】松波功 中日新 聞電子編集部	2月28日	28
大野恒太郎 検事総長 昼食会（会員オ ーブン）	8月25日	49社70人
山内道雄 島根県隠岐郡海士町長（「離 島からの挑戦」）	8月25日	
パネリスト：核のごみ処理問題を考える」 稼働、廃炉、核のごみ処理問題を考える」 パネリスト：赤間早也 香南日本新聞社報 道部記者／青木伸方 福井新聞社政治部 記者／加藤太啓 愛媛新聞社報道部副部 長／佐藤崇 福島中央テレビ常務取締役 報道制作局長	8月26日	
菊池由貴子 大槌新聞代表 交流会	8月26日	
韓国大使館訪問・李熙燮政務公使会見／ 李俊揆 駐日韓国大使ならびに外交官ら との懇談	8月26日	
中村哲 ベシヤワール会現地代表 昼食会 【アフガニスタン復興支援 現地報告】（会 員オーブン）	8月26日	
小泉進次郎 衆院議員 奥山俊宏 朝日新聞編集委員／澤康臣 共 同通信特別報道室次長【調査報道・パナ マ文書報道をめぐって】	8月26日	

詳

中国取材団 7月31日～8月7日 12人 事前勉強会 郭四志 帝京大学教授 北京着・祝寿臣 中国新聞工作者協会書 記と意見交換 北京・「車庫カフエ」訪問 張大明 共 同経営者会見▼畢吉耀 国家発展改革委 員会対外経済研究所長会見 瀋陽・張紹瑞 遼寧省新聞弁公室副主任 会見▼中国工業博物館見学▼9・18歴史 博物館見学▼聖清昭陵（世界遺産）見学 ▼姜鳳羽 遼寧省新聞工作者協会主席と 意見交換 鞍山・鞍山鋼鉄集団訪問 展示室、自動 車向け鋼板製造ライン見学▼鞍山ハイテ ク産業開発区見学 瀋陽・瀋陽故宮（世界遺産）見学 杭州・李丹 浙江省新聞工作者協会主席 と意見交換 杭州・アリババグループ訪問 孫炯 副 総裁・国際事業部日本マーケティング・ ディレクター会見▼杭州市インタートネッ ト金融団地建設担当者概要説明、個人 資産管理アプリ開発会社訪問▼浙江日報 報業グループ訪問 周咏南 副編集長ら と意見交換 杭州・西湖（世界遺産）観覧▼宋城（テ ィマバーク）見学 上海・陳静溪 上海市新聞弁公室副主任 会見 上海・上海ディズニールランド訪問 上海 国際観光区管理委員会および上海ディズニ ールランド広報担当者の概要説明	7月29日	7月31日	8月1日	8月2日	8月3日	8月4日	8月5日	8月6日	8月7日
フランス・スイス エネルギータ材団 パリ・新アレバ・デューロー営業等担当上 席執行副社長▼アレバNP・エリエン ル営業等担当副社長▼環境・エネルギ ー・海洋省／エネルギ―・気候変動総局・ パン副総局長▼放射性廃棄物管理機構 （ANDRA）・ウズニア国際部長▼フ ランス電力（EDF）・ユルサ原発新設計 画担当上級副社長▼タンタック上院議員 （エコロジー・グループ所属） ビュール村・放射性廃棄物管理機構ビュ ール地下研究所・広報担当者の概要説明 ▼地方情報フォロワーアップ委員会代表▼ 研究所と技術センター見学▼パリへ移動 シエルブル・アレバ社・ラ・アグ核 燃料再処理工場・マルティネ副工場長の 概要説明、使用済み燃料の貯蔵プール等	10月9日～19日	10月10日	10月11日	10月12日	10月13日	10月14日	10月15日	10月16日	10月17日

見学▼ビエ・ラ・アグ再処理工場地域 情報委員会委員長 シエルブル・EDF社フランマンビル原 発・欧州加圧水型原子炉3号機建設現場 の説明▼フランマンビル原発地域情報委員 会代表▼パリ経由でアビニョンへ移動 アビニョン・フランス原子力・代替エネ ルギー庁（CEA）／マルクール研究所・ ギベルト研究所長、カレルアストリ ッド（ASTRID）計画マネージャー ▼高速増殖炉原型炉「フェニックス」廃炉 視察▼アレバ社メロックスMOX燃料工 場・ジュールダン製造部長▼パリへ移動 スイスへ移動 スイス・モンテリ岩盤研究所見学 ボン ボリスNAGRA国際プロジェクト室長 ▼ビュレンリンゲン放射性廃棄物中間貯 蔵施設見学 スイスからパリへ移動▼パリから東京へ 東京着 解散	5月9日～10日	5月9日	5月10日	5月11日	5月12日	5月13日	5月14日	5月15日	5月16日
高知県 南海トラフ対策取材団 南国市・大湊小学校南津波避難タワー▼ 尾崎正直 高知県知事会見▼「わんぱ くこうち」で津波救命艇の見学と説明▼ 岡村真 高知大学特任教授ブリーフィ ング▼下地区減災連絡会との懇談 大西勝也 黒潮町長会見▼黒潮町万行地 区津波避難タワー▼黒潮町缶詰製作所▼ 上川口小学校訪問 前田浩文校長▼中土 佐町久礼津波避難タワー 池田洋光町長 の説明	7月4日	7月4日	7月4日	7月4日	7月4日	7月4日	7月4日	7月4日	7月4日
首都直下地震 備えの現場を歩く 墨田区役所・菅原幸弘防災課長らの説明 ▼東向島・墨田エリアを徒歩で見学▼白 鬚東アパート見学・施設説明▼南千住エ リアをバスで見学▼西川太一郎 荒川区 長会見▼荒川区町屋地区を徒歩で見学	10月3日～5日	10月3日	10月3日	10月3日	10月3日	10月3日	10月3日	10月3日	10月3日
熊本取材団 10月3日～5日 10人 西村博則 益城町長会見▼益城町被災地 域見学▼同町潮井神社▼同町小谷地区テ クノ仮設団地見学▼熊本日日新聞訪問 熊本城視察・取材▼南区液化化復興対策 協議会との懇談、液化化被害地域取材▼ 蒲島郁夫 熊本県知事会見▼樋口務「N POくまもと」理事会見	10月3日	10月3日	10月3日	10月3日	10月3日	10月3日	10月3日	10月3日	10月3日

阿蘇大橋崩落現場付近を視察▼阿蘇神社訪問、全壊した楼内などを視察。権欄宜・池浦秀隆さんらによる説明▼熊本空港で解散

10月5日

沖縄与那国・石垣取材団

11月30日～12月3日

15人

石垣島…具志堅用治 八重山漁協船主会長▼柳澤協二氏講演参加(主催：石垣島に軍事基地をつくらせない市民連絡会)石垣島…上原秀政 石垣島への自衛隊配備を止める住民の会共同代表▼伊良部幸吉 八重山漁協代表理事事務▼石垣海上保安部視察 宮崎一巳 保安部長▼中山義隆 石垣市長▼慶田城用武 尖閣列島戦時遭難者遺族会長▼砥板芳行 石垣市議▼懇談会 新垣玲央 沖縄タイムス、謝花史哲 琉球新報の両八重山支局長与那国島…塩満大吾 陸自与那国駐屯地司令、施設見学▼外間守吉 与那国町長▼田里千代基 与那国町議

12月2日
12月3日

福島第一原子力発電所取材団

2月6日～9日

41人

A班福島第一原発取材…大型休憩所(昼食も)▼降車して114号機建屋外観▼56号機建屋外観▼夜ノ森鉄塔倒壊現場▼他核種除去設備▼タンク群▼サブドレンピット▼陸側遮水壁冷凍プラント監視室▼免震重要棟▼内田俊志所長取材B班合流 周辺取材…さくらモールとみか見学・取材、菅野利行 産業振興課長による説明(富岡町)▼Jヴィレッジ工事現場見学・取材 小野俊介 統括部長による説明(広野町)▼日本原子力研究開発機構(JAEA)橋本遠隔技術開発センター見学・取材 各研究設備やバーチャル・リアリティシステムなど(橋本町)▼開沼博立命館大学准教授との夕食・懇談(郡山市)周辺取材…馬場有 浪江町長会见(同町二本松事務所)▼篠木弘 葛尾村長会见(同村役場)▼遠藤雄幸 川内村長会见(同村役場) いわき駅でA班解散

2月9日

岩手・宮城取材団

2月13日～15日

10人

三陸鉄道…中村一郎社長あいさつ、北リアス線乗車(宮古)田野畑村―田老 富手

2月13日

淳旅客サービス部長が同乗(説明)▼宮古市田老地区の防潮堤建設現場 震災遺構「たろう観光ホテル」など視察 元田久美子さん「学ぶ防災ガイド」案内たろう観光ホテル・松本勇毅社長と懇談(以上宮古市)▼吉祥寺・高橋英悟住職の話▼三陸花ホテルはまきく宿泊(以上大槌町)

旧大槌町役場見学▼平野公三 大槌町長会见(現大槌町役場)▼赤浜地区(高台の復興住宅建設地域)見学▼小野食品大槌工場訪問、小野昭男社長の話▼岩手県立大槌高校「復興研究会」メンバーと懇談(以上大槌町)▼照井翠氏(俳人・釜石高校教諭の話(釜石市))

2月14日

菅原茂 気仙沼市長会见(同市役所)▼今川悟、熊谷雅裕両市議会議員同行で離島・大島へ(フェリー)▼島内防潮堤工事現場視察後、亀山山頂へ。大島架橋促進協議会の小松武会長など地元住民と懇談▼NPO法人ピースジャム訪問 佐藤賢理事長と懇談(以上気仙沼市)▼一ノ関駅で解散

2月15日

福島・宮城取材団

2月21日～22日

18人

菅野典雄飯館村長会见(同村役場)▼いいたて活性化センター・いちばん館地元野菜を使った非破壊式検査機器の実演▼交流センター「ふれ愛館訪問、「いいたてまていな太陽光発電所」の概要説明(以上飯館村)▼菊池製作所南相馬工場見学、佐藤弘見執行役員の話(南相馬市)▼サンエイ海苔訪問、立谷一郎社長と懇談(相馬市)松川浦漁港での試験操業視察、伊東充幸農林水産課長の説明(相馬市)▼千年希望の丘を見学▼菊地啓夫岩沼市長会见(同市役所)▼玉浦西住民協議会幹部と懇談(以上岩沼市)▼山元いちご農園見学▼齋藤俊夫山元町長会见(同町役場)▼山元町臨時災害FM放送局りんごラジオ訪問、高橋厚局長夫妻と懇談(以上山元町)▼常磐線山下駅(昨年12月開業)から仙台駅へ▼仙台駅で解散

2月22日

試写会・上映会

19回

ふたりの桃源郷
オマールの壁
サンマとカタール 女川つながる人々
シチズンフォー スノーデンの暴露
圧殺の海第二章「辺野古」

4月7日
4月14日
4月22日
5月10日
5月31日
42
55
29
180
26

シアター・ブロンベン
女を修理する男 The man who mends women - The wrath of Hippocrates ※
Paper Lanterns 灯籠流し ※
太陽のめざめ
五島のトラさん
ザ・テノール 真実の物語 ※
クワイ河に虹をかけた男
みかんの丘
湾生回家
抗いの記〜記録作家 林えいだい
アイヒマンの後継者 ミルグラム博士の
恐るべき告発
かけはし
わたしは、ダニエル・ブレイク
娘よ

6月13日
6月17日
6月24日
7月15日
7月25日
8月1日
8月10日
8月22日
10月7日
10月28日
1月20日
2月3日
2月17日
3月3日
82
64
70
75
40
62
51
20
68
40
73
32
82
54

賛助会員の会

2回

倉重篤郎 毎日新聞論説室専門編集委員
小栗泉 日本テレビ政治部担当部長
会田弘継 青山学院大学教授

7月1日
3月6日
25

一般行事

5回

日本・ベルギー友好150年記念 ベルギーの夕べ
総会記念講演 大村智 北里大学特別栄誉教授(フーベル賞受賞者)【私の歩んできた道】
2016年度日本記者クラブ賞贈賞式・パーティー
2016年度日本記者クラブ賞受賞記念講演会 尾崎真理子 読売新聞文化部長
ジヤーナリスト 堀川恵子氏
新年互礼会員懇親会

4月11日
5月25日
5月25日
6月7日
1月16日
129
171
185
94
200

趣味の会

13回

囲碁の会 4/23、5/28、6/18、7/16、9/17、10/22、11/26、12/17、1/28、2/18、3/24
ゴルフ会 4/5 藤沢ゴルフクラブ、10/5 八千代ゴルフクラブ

7
12
11
26
24
10